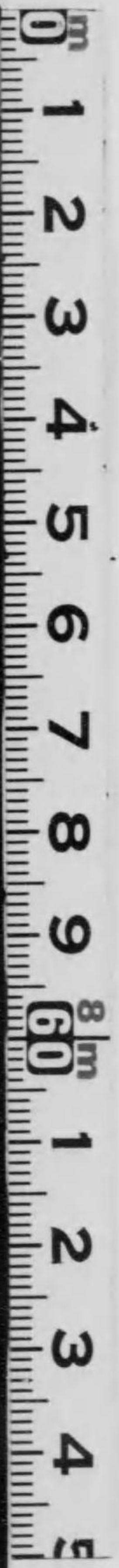


9338
B93
2a⑦



始



2121

~~577179~~

933.8

B93

200

(7)



全 譯

小

公

子

水

野

葉

舟

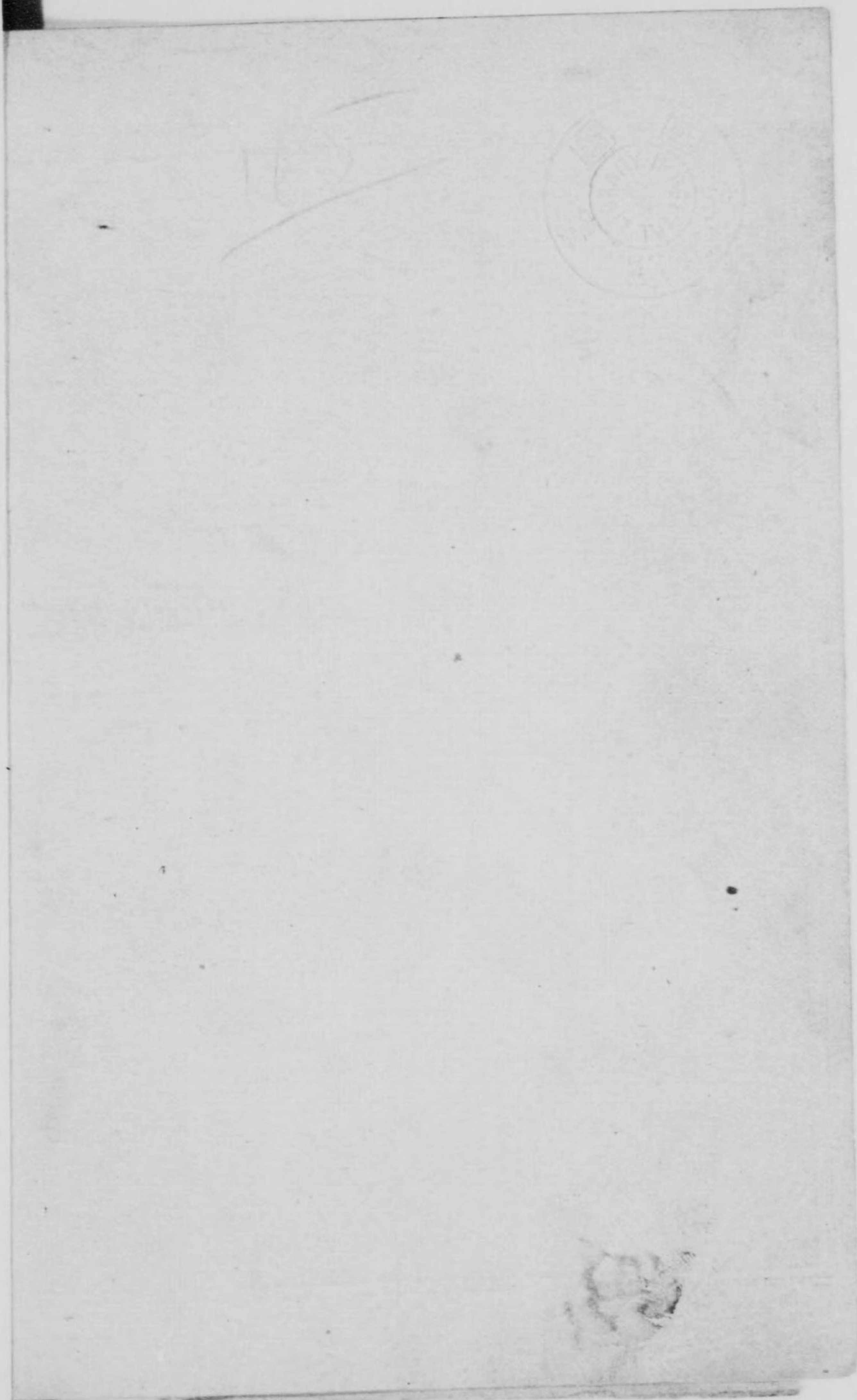
大正

12. 3. 24

内交



欠



欠

聞き親しんだお伽噺に比べられる性質のもので、更らに、それよりも複雑な効果を、この人世に向つて持つてゐるのです。既に幼い子供達よりも複雑な考へを持つ事の出来る人達に向つて、「人間の善良」について教へる力があるからです。それは讀者の心は一樣でなく、その生活も一つの型に依つて定められてゐない現代であるのですから、この物語が感じられる感じ方と言ふものも、決して一樣である筈はない。それはあたりまへの事です。讀者の心に映るこの物語の反映の深淺、輕重については、私は自由だと思ひます。それがどうであつてもよろしいが、一つ美しい純眞な心が、これを讀んだ人達の心に星のやうに輝けば、それで充分であると思はれます。それは恐らく、その人々の心に播かれた種子の一つになるでせう。そして何時の時に、何事かに向つてその人達の心が働く場合に、その心

に輝く事がありませう。

さういふ美しい種子は、私達にとつて、まだ知らなかつたものである事もあり、又、知つてゐてもはつきりと心つかずにゐたものである事もあります。ストオ夫人の「トムをぢの家」(“Uncle Tom's cabin”)といふ一冊の小説が表れて、アメリカの人の心に「奴隷」に對する自分達の行爲を反省させた、といふやうな事は、誰でも聞いて知つてゐる事ですが、その力は、さういふ大きな問題だけに働くのではなく、もつといろいろな隠微な事にも、その力が働くのです。例を挙げたら限りはありませんが、私は今、こゝでは悪人が或る物語を讀んで、その行ひを改めたとか、大酒家に禁酒をさせたとか、放蕩者を正道に返したとか、さういふ例を殊更らに考へ度くないのです。恐らくさういふ例は、際立つて世間に吹聴される事こそ少いとして

も、人生のいろいろな方面では、それぞれの人の感動が、どんな風に表れてゐるか、はかる事の出来るものではありません。

しかし、それはそれで良いとして私はさういふ何か特別の場合、つまり人が執念深い「悪」の虜になつてゐる場合などを一般の事として考へて、さて、それに對する必要などの點から、この種の物語が——美しい心で書かれた通俗の物語が、多くの人に讀まれる事を希望するといふわけではありません。私はもつと静かな平常な心の人に向つて要求する事があるのです。

一一

私は、人が好んで物語を讀むといふ本性を、喜ばしい事だと思つてゐます。何故といふに、その人達は、その好む事をする間に、し

せんとその心が耕され、各みづからを美しくし、善良にする力を受けると思ふからです。何も際立つた恐しく強い力に依頼する事でもなく、又は惱み通した懺悔の結果でもなく、自分を反省する感動の動機が、静かに人の心に起ると思ふからです。この事は、血涙を絞つてする自己革命と同じ位に、人にとつて必要な事です。

かういふ力を持つた物語を、私は世間に向つて多く流布させる事を希望してゐるのです。それに對しては、文學上の尊敬すべき作品は、限りなく偉い力を持つてゐるものです。トルストイとか、ユ・ゴーとか、その他、多数の立派な「先生」達が、私達人類のうちに生れて来て、その魂からあふれて出た物語がある事は、すべての人の感謝すべき幸福です。さういふ物語の持つてゐる働と同じ働を持つてゐる、通俗の美しい物語がある事も、私達は喜んで感謝し

なければならぬ事だと思ひます。それはそれぞれの物語、がそれぞれ持つてゐる力に依つて、人によい食物を送る力があるからです。たとへば、いろいろの食物が、それぞれの滋養があるやうに。

で、それに就いても、私の痛切に感じる事は、世間の多くの人が、さういふ讀み物を選ぶについて、何かの點で定つた考へを持つて居ると思はれ憎い事です。何でも手當り次第の讀書と、それから世間の評判に動かされて動搖する心だけしか持つてゐない人が、餘り多すぎると思はれる事は、實に恐しい事に思はれます。つまる處、これは一般の人が、人生に對する定見といふものに對して餘り缺けてゐる結果だと言はれても仕方がありますまい。

ともかく、或る何かの權威を持つてゐる家庭には、その家庭としての讀書に對しても、一定の方針がある可き事だと思はれます。小

説を讀むと風俗を害する」とか、「文學に濯れた爲めに間違ひを起した」とか一頃よく教育家などが言ひ、或は「嚴格」な家庭だからさういふ事は許されないのだなどと言ひ傳へられてゐる家庭もありました。是等は「法外な馬鹿氣た考へを持つてゐるものの意見」と私は一言で言ひ消してしまひます。さういふ意見はほんの風に吹き拂れる埃のやうなものです。しかし一方に、それとは反對に、何にも「選ぶ」といふ事を知らない人達も、それは恥しい無智だと言はなければならぬと思ひます。だから、どの家庭でも、その監督者はその人の方針に依つて、その家庭の本流となる讀みもの選擇をされる事、その結果として、その家庭の書庫には、或る嚴とした「人生に對する意見」の表れがある可きものだと思はれます。これは決して、一種の道徳づくめの考へからではありません。そ

の事を明かに斷つて置きます。それよりもつと自由で、光輝のある心の要求から起るものであると思はれます。で、「選ぶ」といふ事については、それに方則を立てるものではないと思ひます。又、その範圍を限るものでもないと思ひます。しかし、國の民衆の爲めに健康を贈物とするものが、どの點から見ても正しいし、いゝと言はなければならぬ事は、當然の事であると思はれます。

三

私は、これ等の本を、世間に送るについては、深くさういふ事を考へさせられるのです。さて、それについても、その作者の眞實の心の匂ひを表す力は、その物語の言ひ表し方に依ると思ひます。つ

まり第一は物語そのものの美しく善良である事、第二には、その美しさが人に沁み渡る力——これは、「言ひ表し方」の一點に主要な効果があるものです。

一つの獨立した國語を持つてゐる國民の性情の美醜は、その魂を言ひ表す言葉が代表するものです。従つて、亂雑で、粗野で、生存力の弱い言葉が、その民族の國語となるとすれば、それはその國が自ら卑賤のものになる事であると思はれます。特に今の時代では私達は自分の國語について、その流れに逆つて働かなければならない場合になつてゐます。それについても美しく、そしてよく書かれたこれ等の本が知らず知らずのうちに、或る効果を持つてゐる事を信じます。

以上は私の根本の意見です。それでこの本を公にするについては、私は自分として十分に注意して書いたと公言します。

この本は前に若松賤子女史の譯本があります。その本は、見事な譯ですが、出版された年がずつと前であつた爲めに、今ではその言葉を十分に訂正する必要のあるものになつてゐます。私はこの本を譯すに就いて、その前の譯本から、非常に恩恵を受けました。或る點までは前の本の訂正になつてゐる處もあります。それはこゝに明かに言つて置き度い事です。しかし、私はも一つ言つて置き度い事がありますのは、前の譯本が、餘り或る片寄つた感情で表されてゐるのを、私はよくないと思ひました。そして原作にも、さつぱりしないさういふ傾きがあるので、その點には私の人生に對する立場からその色彩を薄くしました。この事も斷つて置き度い事です。私の

考へでは、これ等の物語の或るものは、慎重な考へを根蒂として見
 た上で、自分の國の國民性に對して適當な取扱をする方が、盲目的
 な翻譯の忠實よりも、正しい効果がある場合があると思はれるので
 す。それに就いて、私はこの本に對して慎重な責任を帯びて、譯し
 終つた事を、こゝに言つて置き度いと思ひます。
 ともかく、この本は、人に純粹な感情の力で起す感動を持つてゐ
 るものです。それがどれ程美しいかをよく物語つてゐます。

一九二二年秋

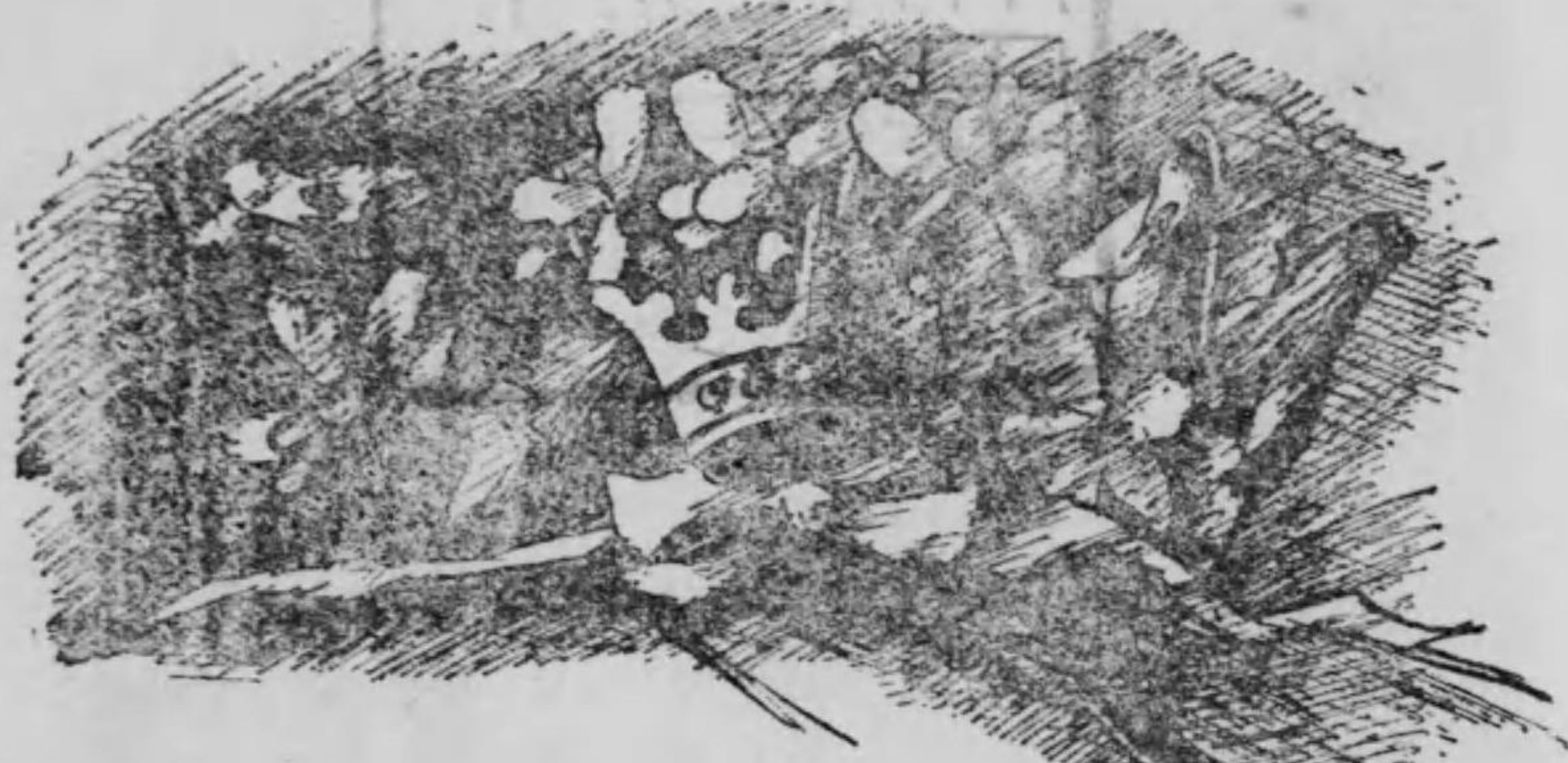
水野葉舟

小公子

目次

| | |
|-------------|-----|
| 一、びつくりした出来事 | 三 |
| 二、セドリックの友達 | 三〇 |
| 三、それ／＼の贈物 | 一〇三 |
| 四、イギリスで | 一八 |
| 五、お城のなか | 一五四 |
| 六、伯爵とその孫 | 二〇九 |
| 七、會堂のうち | 二七六 |
| 八、馬の稽古 | 二九八 |

- 九、荒れたあはれな家……………三六
- 十、伯爵の驚き……………三九五
- 十一、アメリカでの心配……………三九九
- 十二、競争者……………四三一
- 十三、助けに来たデック……………四五八
- 十四、露顯……………四七四
- 十五、小公子の八つの誕生日……………四八八



一 びつくりした出来事

セドリックは誰も話して聞かせてくれなかつたので、その事については何にも知らなかつた。お父さんがイギリスの人だったといふ事だけは、お母さんに聞いて知つてゐた。けれどもそのお父さんの亡なつたのは自分のまだ極く稚さい時だつたので、お父

さんの事は、何にもよくは覚えてゐないのだつた。唯からだの大きな人で、腫が青くつて、頬髯が長く、そして、その肩に載せて、部屋のなかぢうを歩きまわつて貰つた、その面白かつた事しか覚えてはゐなかつた。

そのおとうさんが亡つた後では、セドリツクは、お母さんにあんまりお父さんの事を言はない方がいゝ、といふ事に気がついた。お父さんの病氣の間ぢうは、セドリツクは、他處に預けられてゐた。そこから連れられて歸つて來た時には、もうすつかりいろいろの事のすんだ後で、そのあとでひどくわづらつたお母さんも、やつと床から起きて窓際の椅子に腰をかけられるやうになつておいでの際だつた。そのお母さんの顔はまだ青く、ふだん美しい笑靨も消えて見えなくなつた。眼が悲しさに大きくなつてゐた。そして、お母さんの著物は、眞黒な喪服にかはつてゐた。

「お母さん。お父さんはもうよくおなりでしたか？」

と、セドリツクが言つたら、つかまつてゐたお母さんの腕が震へたので、セドリツクはちぢれ髪の頭をふり向けて、お母さんの顔を見た。すると、自分も何だか泣き出してしまひさうな心持になつて來た。それでもまた、

「お母さん。お父さんはもうよくおなりでしたか？」

と、前と同じことを繰り返して言ふと、セドリツクは、どうしたわけか、俄かにお母さんの頸に自分の手をまはして、幾度もキスしてあげなければならぬ心持がしたので、さういふ風にして、それから自分の柔かなほつべたを、お母さんの頬に推しつけるやうに爲た。さうすると、お母さんは、もう決して離さないといふ様子で、しつかりセドリツクを抱きしめ、その小さい肩に顔を押し當てて、聲を立ててお泣きになつた。

「さうよ。お父さんはもうおなほりになつたのよ。すつかりもうよくおなりだつたの。けれどもね、私達は——私とあなたとはね、二人つきりになつてしまつたの

よ。二人だけで、その他には誰も居なくなつたのよ。と、お母さんに涙聲で言はれて、それでセドリックは子供心にも、あのしつかりした、年のまだ若いお父さんは、もうして歸つておいでにならないといふことが、わかつたのであつた。他の人の事によく聞いてゐたやうに、お父さんはおなくなりなかつたのだらうと思つた。けれども、それがどういふ不思議な譯で、こんな悲しい事になつたのか、どうしても、はつきり心にわからないのだつた。それで自分がお父さんの事を言ひ出しさへすれば、いつでも、きつとお母さんは泣き出しておしまひになる。だから、これはあんまりお父さんの事は言はない方がいいのだ、言はないやうにしようと、心の内できめてしまつた。それからお母さんが、ストーブの火をじつと見入つてゐたり、窓のそばに黙つて身動きもせず坐つておいでになる時には、そのままほつて置いてはいけないと言ふ事もわかつた。

お母さんと自分との知りあひといふのは、ごく僅かの人で、わきから見ると、

7

大變寂しい生涯のやうだつたけれども、セドリックは少し大きくなつてから、この家に人の訪ねて來ないわけがわかるまでは、それを別に寂しいとも思はずにゐた。大きくなつてから知つた事は、お母さんは孤兒で、お父さんがお嫁にお貰ひになるまでは、この廣い世界ぢうに、一人つぎりの親類も何にもない人だつたといふ事であつた。お母さんは大變美しい人で、前の時分、ある金持ちの婦人の介添になつておいでだつた。ところで、その婦人といふのはちつともお母さんを深切にしてくれなかつた。或日キャプテン・セドリック・エロルとその家で呼ばれてゐた人が、てうどその婦人の家に訪ねて來てゐた時に、何かいやな事があつたあとで、お母さんが睫毛いつばいに涙をためて、急いで二階に上つて行く處を、そのキャプテンが見たのだつた、そしてそのあとけない、萎れた、かわい、姿を見て、心に忘れる事が出来なくなつた。そのあとでそれから、いろいろ妙に心の觸りあふ事があつて、兩方て心を知りあひ、愛しあひ、しまひに結婚をなさるまでになつたのであつた。

處が、この結婚については、いろいろな人から、反對をされた。その中で一番ひどく怒つてしまつたのは、キャプテンのお父さんであつた。この人はイギリスにゐる人で、大變なお金持の、イギリスでも名高い貴族であつた。ひどい癩癩持ちで、アメリカとアメリカ人とが大嫌ひの人だつた。

それでこの人にはキャプテン・エロールの上に、もう二人子供があつた。イギリスの法律では、その家の爵位も財産も、すつかり長男になるものが受け継ぐ定なのである。もしその長男が死ぬと次男があとを継ぐといふ事になつてゐる。それでキャプテン・エロールは、さういふ立派な貴族の家に生れたものではあるが、三男なのでその大變な財産を受取るといふ見込みはないのだつた。けれども、キャプテンには、その二人の兄さん達が生れつき持つてゐない、立派な性質と才能とが與へられてゐるのであつた。美しい顔かたちと、がつしりした姿と、快活な笑ひと、晴れやかな聲と、それから大膽で、深じて、誰に對してもおとなしいその人のとりなしが、

すべての人に親愛の心を起させる力を持つた人であつた。反對に、二人の兄さんといふのは、顔かたちも美しくなく、才能もなく、心も素直な人でなかつた。それで、子供のうちイトンの邸にゐた時にも人に嫌はれてゐたし、大學にやられてからも、強勉は大嫌ひで、そこに居るうちちう、たゞのらくらして時をすごしてゐるばかりで、ちやんとした友達も出來ずにしまつた。それでお父さんの伯爵はこの二人には、いつも失望してしまつてゐたし、いかにも迷惑と思つてゐる様子であつた。自分の家を譲る筈の子供は、先祖の家名に對して譽になる事が出來ないだけでなく、男らしい、高貴な性質は、ちつとも持つてゐない。たゞ自分のつまらない心のまゝの事をして、無駄使をする事を知つてゐるばかりの、やくざな人間である。それなのに、位も財産も受けない末の子が、その二人の持つてゐない才能や、徳や、美貌をみんな持つてゐる、これはお父さんにとつて、いかにも残念な事であつた。

或る時には、その高貴な爵位や、廣大な財産に相當する美しい性質を、兄さんに

與へられずに獨で持つてゐる、その末の子がお父さんの心には憎くなる事もあつた。それでゐて、その傲慢な、自分を持ち切つてゐるその貴族の心には、この末の子をかわいがらずにはゐられないのであつた。とつたらう、そのくさくさする癩に觸る心持をおさへ切れないで、むら／＼となつたはずみに、俄かにその三男をアメリカに旅にやつてしまつた。これは見さん達の無頼な行ひに困り切つてしまつたあげくに、それに比べて、末の子のちやんとした、おとなしい様子を見てゐると、腹が立つてたまらない爲めで、その末の子を、自分から遠けて見たら、と思ひついたらからであつた。

處が、六ヶ月もたないうちに、伯爵は自分が寂しくつてたまらなくなり、心のうちで末の子の顔が見たくなつたので、キャプテンに手紙を出して、歸つて来るやうにと言つてやつた。その手紙と行き違ひに著いた、キャプテンの手紙に、アメリカで逢つた或る若い娘の事と、それから、その娘と結婚をする決心をした、といふ

事が書いてあつた。伯爵が、このキャプテンの手紙を読んだ時には、それはひどい怒り方であつた。ふだんから癩癩もちではあつたが、此時ほどひどい癩癩を起した事はない位であつた。その手紙のついた時に、てうどそい伯爵のそばにゐた側づかへのものが、その時の様子を見てゐて、殿様がひよつとすると卒中でもおこしはなさるまいかと、心配した程だつたといふ事である、それ程ひどい怒り方であつた。大方一時間餘りも、虎のやうに哮り立つて、そのあげく、ほんの簡単な手紙でキャプテンに言ひ送つた。それは以後一切その生れた邸に歸つて来る事はならない。それから親にも兄弟にも、手紙も出す事はならない。これから後にどんな風にも勝手にくらすがいし、どこでも勝手に死ぬがいし、この家とは、永久縁の切れたと見て、自分の生きてゐるうちは、決して補助は受けられないと覺悟をするやうにと

言つてやつたのだつた。
キャプテンは、この手紙を読んで大變悲しがつた。この人は故郷のイギリスを懐

しがつてゐたし、その自分の生れた立派な家も、ひどく戀しがつてゐた。それに癪癪のひどい父の伯爵に對しても、親しみの深い心を持つてゐた。これまでに、その父がいろんな事で失望したのを見てゐて、それを氣の毒に思つてゐたのだが、この最後の手紙を受け取つてから、もう父との間が全く斷絶したと思つて、本意でない餘儀ない心持で覺悟をした。

それから初のうちは、どうしたらいいだらうと、途方にくれてゐた。これまでの育ちが育ちなので、さてすぐに働いて自分のくらしを立てる、といふ事には慣れてゐなかつた。仕事をする経験もなかつた。しかし、勇氣も決斷力も充分もつてゐる人だつたので、先づ自分のイギリスの士官の資格を賣り拂つてしまひ、それからいろいろ困つた目にあつたあとで、やつとの事ニューヨークの町で、自分の勤める處を見つけた。さうして間もなく、そのアメリカの娘と結婚をした。

それでキャプテンはイギリスの貴族の若殿であつた人が、こんな落ちぶれた身分

になつたのは、前に比べると、ひどい違ひ方ではあつたけれども、まだ元氣も熾だし、世の中に面白いと思ふ事も多い年頃なので、勉強さへすればどんな事でも出来ると思つて、ひどく未來に望みをかけてゐた。その時に落ちついた家は、場末の町の、小さな家で、その家で男の兒が生れた。それで尙ほの事、質素にくらしてゐたが、かうして家庭をつくつてからも、萬事が珍しく、だんく樂しくなつて行くのだつた。だから、いちづにかわいと思ひ込み、その人からも愛されたといふだけで、人のおつきをしてゐた位の身分の女を妻にした事を、後悔した事などは、たゞの一度もありはしなかつた。

それに、全くこの婦人はどこまでもかわい、人で、それから生れた男の兒も、両親によく似てゐた。こんな場末の小さな家で生れた子ではあつたが、その幸福は、どんな立派な人にもまけない程だつた。一つに、この子はいつもたつしやなので、ちつとも人に心配をかけなかつた。二つには、心持が柔和で、實にかわい、子だつ

たので、どんな人からも嬉しい心持で迎へられた。三つには、その姿の美しくかわい、事は、何とも言ひやうの無い程だった。頭にはどこの赤坊にもよくある、禿げ坊主のやうな、薄つ毛ではなく、生れた時から軟かい細い黄金色の髪の毛が、ふつさりしてゐた。六月もたつた時分には、それがかわゆくちゞれて、眼は大きく、それが茶が、つた色で、長い睫毛で、どう見ても愛くるしい顔をしてゐた。そのからだつきは赤坊の時から、逞しくがつしりしてゐて、九月になると、急に獨りて立つて歩けるやうになつた。その上、大變人なつこい兒であつた。まだ小さい乳母車に乗せられて、町を運動してゐる時分、誰でも通りすがりに傍によつて、あやすものがあると、その大きい茶色の眼で、じつと生眞面目さうに見つめると思ふと、かわいらしい様子で笑ひかけて、それなりにすぐその人とおなじみになつてしまふのだつた。こんな風だつたので、このひつそりした町のなかで、この兒を見ると、誰でもそれをあやさずにはゐられないのだつた。

年がたつて行くにつれて、セドリツクはその上にも綺麗でかわいくなつて來た。赤坊から子供になつて、短い上著を著、大きな帽子をかぶるやうになつてから、小さな車を引つぱつて、乳母といつしよに町を歩いてゐる時には、よく往來の人が立ちどまつて、見とれてしまふのだつた。

家に歸つて來てから、乳母が、セドリツクのお母さんに、こんな事を話したのは、幾度だつたか知れない。

「ねえ奥様、今日は馬車に乗つた女の方が、坊つちやんを見ようつて、わざ／＼車を止めさせて、坊ちやんにお話をしかけなさいました。そして坊ちやんが、もう舊くつからのお友達でもあるやうに、嬉しさうにお話をなさると、その女の方が大變喜んでいらつしやいましたよ。」

全く不思議だと思はれる位の、このセドリツクのかわいさといふものは、大方、それはちつとも怖氣といふものがなくつて、素直に人なつこいせいであつたらう

が、それは生れつき人を信じる性質で、深々に人の心持を思ひやる思ひやりがあつて、その爲めに自分も心持が楽しくなり、人にも楽しい心持にしたいと考へる性分から起るものだと思はれる、その爲めに、自分に向ふ人の心持がすぐわかるのであつたらう。これはセドリツクのお父さんお母さんが、互に愛しあひ、思ひあひ、底ひあつて、どちらからも譲る處を、ふだん見習つてゐて、しぜんとその風にも自分も感化されたものであるらしい。家の中にゐる時に、不深切らしい、失禮なもの言ひ方を一度も聞いた事がない。いつも誰からもかわいがられ、よくやさしくされて取扱はれてゐるので、この稚い子供の心には、深切な心持と、穏な情とでいっぱいになつてゐたのである。

まあ例へて見ると、お父さんがお母さんに對して、いつも物柔らかな言葉でものを言ふのを、ふだんから聞き覚えてゐるので、自分でもそんな風にものを言ふやうになつたのだし、お父さんがお母さんを庇つて世話をするのを見て、自分もお母

さんの爲めに、深切な心づかひをするやうになつたのであつた。

だから、お父さんがもう歸つておいてにならない事を知つたあとで、お母さんがひどく悲しうにしておいての様子を見ると、これからは自分がお母さんを慰めてあげなければならぬと覺悟をしたのだつた。まだ年のいかない、ほんの赤坊なのだけれども、お母さんの膝に上りあがつてキスをし、そのちとれ毛の頭をお母さんの首の處にすり寄せて甘へる時でも、自分のおもちやだとか、繪本だとかを持ち出して見せたり、ソファの上にお母さんが横になつてゐるそばにすり寄つて來る時でも、その心持は忘れてはゐないのだつた。たゞ稚いので、他にどうしたらいいかわからなかつたので、出來るだけの事をしたのだつた。それがお母さんには、セドリツクの思つたよりも強い慰めになつたのであつた。

或時、お母さんが前の時からゐる下女にかういつた事があつた。

「ねえメリー、あの子は、子供心に私を慰めてくれるつもりで居るのだよ。きつと

さうだと思はれるよ。時々、それはかわいい、ひどく見入つてゐるやうな顔つきをして、氣の毒だといふ様子で私を見ると思ふと、それから私によつついて甘へかゝつたり、面白い繪本を見せようとするのだよ。何だか小さな大人のやうな心持を持つてる子だね。私は本當にさう思はれるよ。本當だよ。」

一つづゝ年をとつて行くにつれて、セドリックのかわいい様子は、だん／＼人を喜ばせる事が強くなつた。お母さんにとつては此上もない慰めで、お母さんはセドリックの他には、友達がほしいとも思はない程だつた。二人は散歩をするのにも、話をするのにも、遊ぶのにも、始終いつしよだつた。

セドリックは、ごく稚い時から、本を読むことを習ひ始めた。すこしそれが讀めるやうになると、夕方、ストーブの前に敷いてある毛皮の上に横になつて、そこで大きな聲を出してそれを讀むのだつた。その本は、子供の嬉しがつて讀むお話の本もあつたが、中には大人の讀む大きな本もあつた。たまには新聞までも讀むのだつ

た。さういふ時には、セドリックが、奇妙な面白い事を言ふので、臺所にゐるメリーがよく、奥さんのおかしがつてお笑ひになる聲を聞くといふ事だつた。

それをメリーが、萬屋の主人に、かう云つて話すのだつた。

「本當に、だれだつて笑はずにはゐられない事ですよ。あんなかわいい様子で、面白い妙な事をおつしやるのなもの！ まあね、かうなんだよ、お前さん。こないだ大頭領の選挙があつたあとでね、臺所のあたしんとい來てさ、両手をポケットに突つ込んで、火の前に立つておいで之處は、それはかわいかつたよ。それから私にかうおしつやるのさ。」メリー、僕は共和黨だよ。お母さんもさうだよ。メリーもさうかい？」とおつしやるから、あたしが、「いいえ、メリーは眞劍な民權黨ですよ。」といつたのよ。すると、それは氣の毒さうな顔つきをなさつてね、「メリー。アメリカが亡びるよ。民權黨は悪い事をするんだからね」つて、夫からと言ふものは、私を共和黨の方にするんだといつて、毎日議論をしいでなさるんですよ。」

メリーはセドリックが大の好きで、そして大變自慢だつた。この下女は、セドリックの生れた時から、お母さんと一しよに此家にゐるので、セドリックのお父さんが亡つてからあとは、臺所の方も、上の方も、それから守までも、すつかり一人でしてゐるのだつた。それでメリーはセドリックの優雅な、しつかりしたからだつきと、かわい、様子とが自慢なのだつた。特別にそのさらくした金髪が、額の處で波をうち、それから肩に垂れかゝつてゐる髪毛が、メリーの自慢なのだつた。そんなわけで、朝も早くから起き、夜はおそくまで夜なべをして、セドリックの子供著の仕立をしたり、つくろひをしたりしてゐるのだつた。

「さうねえ、あゝいふのが本當の品格とでもいふものでせうね。どんな立派な家の坊ちやんだつても、家の坊ちやんのやうな繚致や、様子の好いお子はありません。それはね、奥さんの舊いのを仕立直して拵へただけでも、あの黒天鵝絨のお召を著て、外を歩いてなざると、どんな男だつて、女だつて、子供だつても、振

り返つて見ないものはないんだからねえ。本當に貴族の若様のやうですよ。」と、メリーがいつも人に言ふのだつた。

セドリックは、自分が若様のやうだかどうか、そんな事はちつとも知らなかつた。一體、若様なんて事さへ知つてはゐなかつた。それで自分の一番大切な友達といふのは、こゝらで名うての癩癩持の、町角の萬屋の主人だつた。この萬屋もセドリックには、一度も怒つた事がないといふ噂である。その名はホップスといふので、セドリックはこのおやぢをひどく尊敬してゐて、餘程の金もちのえらい人だと思つてゐるのだつた。なぜかといふと、この萬屋の店には、李や、無花果や、蜜柑、ビスケットなどの、種々雑多のものがいつばい並べてあるその上に、馬と荷車とを持つてたからだつた。

セドリックは、牛乳屋も、パン屋も、林檎屋の婆までが好きだつたけれども、そのなかでも、このホップスといふ人ほど好なものはなかつた。いゝ例へが、毎日そこ

に逢ひに行つて、その爺さんと對ひ合つて、その折その折の事を話して、いつまでも話し込んでゐる。それだけでも、どれ程親しみが深かつたといふ事がわかる。この二人が顔をあはせると、いつでも話がつきなかつたといふのは、實に不思議な程だつた。大抵まづ、七月四日のアメリカ獨立祭の事などが、その話しの種で、此話が始まると、切がない程だつた。

ホップス爺さんは、イギリス人が大嫌ひであつた。或る時獨立の時の話をすつかりセドリックにして聞かせてやつた。その中には、敵方の奸惡な事、味方の勇士の功名談などをするのに、随分變な間違つた愛國心からする話も交つてゐた。そして獨立の宣告文なども、讀んで聞かせたのだつた。

この話を聞いてゐる間、セドリックは眼が光り、頬が上氣をして、髪がびつしよりになる程汗をかいて、一心になつてゐた。その時、家に歸つて來てから、その話をお母さんにしたくつて、御飯のすむまでが待てない程だつた。で、セドリックが

政治の事を面白がるやうになつたのは、全くの初めは、このホップス爺さんの仕込みであつた。このホップス爺さんは、新聞を讀む事が大好きだつたので、首府のワシントンに起つた事件などは、大抵の様子をセドリックに話して聞かせてゐた。その爲めにセドリックは、どういふ風にして大頭領がその義務を盡してゐるとか、こんな事をして義務を盡さなかつたとか、さういふ事も話して聞かせてゐたのであつた。一度、選挙のあつた時などは、セドリックはすつかり夢中になつてしまつて、選挙といふ事を、大變重大な事に思ひ込み、自分とホップス爺さんが居ないと、アメリカがどうかなくなつてしまふといふやうな氣勢になつてゐた。

ホップス爺さんが、その選挙がすんだあとでセドリックを連れて、炬火の行列を見に行つた。その時の行列に加はつた人の中には、町の瓦斯燈のそばに立つてゐて、肥つたずんぐり短い大人の肩に乗せられた、美しい男の兒が、頭の上の方で、帽子をふつてゐたのを見た覚えのある人があるだらう。それがセドリックと、ホッ

ブス爺さんとの二人づれだつたのである。

處で、てうど、この選挙の騒ぎがすんだすぐあとの事、セドリックが七つから八つになる間の頃であつた。セドリックの生涯に大きな變動が起つた、驚く可き出来事が始まつた。そして、その日はホップス爺さんが、不思議な事にてうどイギリスや、イギリスの女皇の話をしてゐて、アメリカ合衆國には例のない貴族といふもの話をしてゐた。それについて大層激しい言葉つきになつて、特別に侯爵とか伯爵とかいふものに向つて、ひどく憤激して話をしたのだつたが、あとで思ひ合せて見ると全く此日は不思議な日だつたのである。

その日は朝からひどく暑かつた。セドリックは友だちと一緒に兵隊ごつこをして遊んでゐたが、ひどく熱くなつたので、一休みしようと思つて、ホップス爺さんの店にはひつて行つた。その時に、ホップス爺さんは、てうど王室の何か儀式の挿繪のついてゐる「ロンドンの或る繪入新聞」を讀んでゐて、すさまじく憤激した顔をしてゐた。そしてセドリックの顔を見るとすぐ、かういひかけた。

「よしよし、今の間に思ふさま勝手な事をしてゐる、下のものを踏みつける眞似をしておけ。伯爵でも侯爵でも、皆の奴ら、見てゐる！ 今に踏みつけた人間の中から、いやつてほど爆き飛ばされるぞ。(これは暴徒やダイナマイトの事) おれの言ふ事に間違ひはないから、みんな目をあけて見てるがよい。」

この時、セドリックはふだんのやうに、高い椅子の上になちよこつと腰をかけて、ホップス爺さんに挨拶をする爲めに、帽子を頭の後に押しやつて、両手をポケットのなかに突つこんでゐた。そして此話を聞いてゐたが、そのあとでかう聞いた。

「をぢさん、その侯爵とか伯爵とかいふ人ををぢさんはどつさり知つてるの？」

ホップス爺さんは、むか／＼する様子で、

「そんな奴を知つてるもんか！ おれのこの店にでも、そんな奴がはひつて来て見るがよい。どんな目に逢ふか！ 弱いものいぢめをする壓制貴族の奴らめ！ 店の明

箱へだつて腰をかけさせやしないぞ！」

といつて、ホップス爺さん大むばりになつて、あたりを睨みまはしながら、汗をかいて湯氣のたつ額を、しきりに拭いてゐた。セドリックは、その話のわけがわからないのだつたが、いかにもその貴族たちが、不合せな人のやうに思はれて、ひどく氣の毒に思はれた。

「ね、をぢさん。その人たちがもつといゝ事を知つてゐたら、そんな伯爵なんぞにはならないでゐたでせうね？」

ときいた。さうすると、ホップス爺さんは、

「どうして？ そいつらはそれで大むばりをしてゐるんだ。あいつらは生れつきなんだ。あいつらは悪黨だ。」

と、むきになつて話をしてゐる、その話の最中に、下女のメリーがふいとそこに顔を出した。セドリックはそれを見て、お砂糖でも買ひに來たのかしらと思つてゐた。

しかしさうではなくメリーは何かひどく、つゝりしたといふ様子で、少し青白い顔をしてゐた。

「坊ちゃん。お母さまが御用ですつて、歸つていらつしやいまし。」

といつた。セドリックはその高い椅子からすべり降りて、

「お母さんと一緒にどこかに行くのかいメリー？ さようなら、をぢさんあとで來ますよ。」

といつて、メリーに連れられて、その萬屋の家を出て來た。メリーがびつくりしてしまつて、よく物が言へないといふ顔つきをして、自分をしげく見てゐながら、しきりに首を振つてゐるのを見て、セドリックは妙な事だと思つた。

「どうしたの？ メリー、あつくつて苦しいのかい？」
と聞いた。

「いゝえさうではないのですよ。坊ちゃん、不思議な事が始つて來たと思つたので

す。

「お母さんがどうかなさつたの？ 日向に出て頭痛がなさるの？」
と、心配さうに聞いた。けれどもそんな事ではなかつたのだつた。家に歸つて見ると、入口の外に小さい馬車が駐まつてゐて、小さい客間で、誰だかお母さんと話をゐた人があつた。メリーはセドリックを急いで二階につれてあがり、クリム色のフランネルの夏著に著換へさせ、もつれてゐる髪のを解してやつた。さうしてゐるうちに、メリーはぶつぶつ獨言をいつてゐた。

「貴族だつて？ 高貴な家柄だつて、それが何になるもんぢやない。貴族？……とんでもない……」

セドリックはどうも不思議で仕方がなかつたが、お母さんに逢ひさへすれば、メリーがそんなに充奮してゐる事を、何でも話して聞かせて貰へる事だと思つて、何とも辟返さずに黙つて見てゐた。で、仕度が出来あがつたので、セドリックは二

階から馳け下りて、お客様のある部屋にはひると、そこには背の高い、もの柔かな、鋭い顔の年とつた紳士が、アームチェアに腰をかけてゐる。その傍の處にお母さんが、これも青白い色をして立つてゐた。見ると、お母さんの目には涙がたまつてゐるやうだつた。

「お、セデイ？」

と、呼びかけると、馳け寄つて来て、お母さんは兩方の腕で自分の子を抱いてキスをした。その様子が、何かびつくりした事があつたのか、心配な事でも起つたやうだつた。その背の高い紳士は、この時に椅子から立ち上つて、その鋭い目でセドリックをじつと見つめたが、その目を離さないで、瘦せた頬を肖張つた手でなでてゐた。それはまづ満足だといふ様子であつた。そのうちにゆつくりした調子で、

「ほう、では、この方がロードフォントルロイでいらつしやいますか？」
といつた。



ニ セドリックの友達

S.

これからあとの一週間の間といふものは、セドリックにはびつくりする事ばかりが續いて起るので、不思議なうそのやうな日を送つたのであつた。何よりもお母さんの話して下さる事が、不思議な

事ばかりで、幾度も聞きなほさなければ、わからないのだつた。

で、それについて、ホップス爺さんは何と思ふだらうと考へると、それがどうなる事かわからなかつた。まづ伯爵といふ事が、其話の何よりも初めだつた。いつたい自分のまだ見た事もないおぢいさんが、伯爵の一人といふ事で、それからそのあとをついで伯爵になる筈の一番上の伯父さんが、馬から落ちて亡くなつてしまつた。そのあとで、も一人の、二番目の伯父さんが、おぢいさんのあとをついで伯爵におなりの筈だつたが、この人もローマといふ處で、熱病にかゝつて俄かに死んでおしまひになつた。かうなると、今度は自分のお父さんが、もし生きておいでになれば、その伯爵のあとつぎになる順序のだけれども、もうそのお父さんはずつと前に亡くなつてしまつた。それでセドリックだけが残つてゐるので、おぢいさんのあとつぎには、セドリックが伯爵になるのだといふ話であつた。それで、おぢいさんのドリコンコート伯爵のあとつぎになる人が、あとつぎのうちに名乗るといふロー

ド・フオントルロイといふ尊稱は、セドリックの新しい名前になつたのだと言ひ聞かされた。この話を初めて聞いた時に、セドリックは思はず顔色をかへてしまつた。「おかあさん。僕は伯爵なんかになりたくありませんよ。僕の友達には伯爵なんかになるものは一人もいないんですもの。どうしてもその伯爵にならなければ、いけな

いんですか？ お母さん。」

といつた。

だが、この事はどうしてもさうしなければ、ならない事であらうかつた。その晩、お母さんとセドリックとは表側の窓から、外の見すばらしい町を眺めながら、永い事その話をしつゞけてゐた。セドリックはいつもしてゐるやうに両手で片方の膝をかゝへて、自分用の低い椅子に腰をかけてゐたが、其顔は何か思ひつめてゐる爲めか、上氣してゐるのだつた。それは、そのおぢいさんが、セドリックをイギリスに來るやうにと、迎への人をよこしたのだつたが、お母さんは、それは行かな

ればいけないとおつしやるのだつた。

お母さんが悲しさを目つきをして、窓から外を見ながらうおつしやつた。

「ね、セディ、もしお父さんがおいでだつたらね、やつぱりさうした方がいいとお思ひになるだらうよ。私はさう思はれるよ。お父さんは大變、自分のお家が好きだつたのだもの。でね、あなたはまだ稚さいからよく解らない事だらうけれどね、さうしなければならぬのは、いろ／＼よく考へて見なければならぬわけもあるのだしね。何よりも、もしお母さんがあなたをイギリスにやらないとすると、お母さんは大變我儘な人になるのですよ。そんな事はね、あなたが大人になつて見るとみんなよくわかる事ですよ。」

と、おいひになつた。さう言はれてもやつぱり、セドリックは悲しさを様子で、頭をふつて、

「僕はねえお母さん。ホップスをぢさんに分れるのがいやで仕やうがないのですよ。」

僕はをぢさんと別れるのがいやだし、をぢさんだつて僕の行くのはいやだらうと思ふんです。それから他のみんなと別れるのも、僕はいやなんです。」
 といった。

それで、イギリスからロード・フォントルロイの迎へにといふのでよこされた、ドリンコート家の家つきの辯護士ハギツシャムといふ人が、その次の日にも此家に来た時に、セドリツクは今度の事に就いて、其上にも尙いる／＼の話を聞かされた。それで大人になつて、家をついだ後には、大變な金持ちの尊い身分になる事、方々にあるお城が自分のものになる事、綺麗な幾つもの土地、大きな鑛山、大きな領地と小作人達と、さういふものがみんな自分のものになるのだといふ話を、聞かされたが、それはセドリツクには嬉しくも何ともなかつた。それよりもホップス爺さんの事ばかりが、氣にかゝるのだつた。それで朝の御膳をすますとすぐ、心配しながら、ホップスの店に出かけていつた。爺さんはてうどのそ朝の新聞を讀んでる處だ

つた。セドリツクはいつにもなく生真面目な顔をして、そのそばに寄つていつた。セドリツクは自分にこんな思ひがけない事が起つたといつたら、爺さんが、ひどくびつくりするだらうと思はれるので、どうかして爺さんを驚かさないうやうにその話をしたいものだ、と、道々その事を考へて來たのだつた。

ホップス爺さんは、

「やあ、お早う！」

と聲をかけた。セドリツクの方でも

「お早う」

といつたけれども、今朝はいつものやうに、爺さんのそばにある、高い椅子には乗らなかつた。そしてそこにあるビケットの箱の上に腰をかけて、膝をかゝへながら、暫くの間じつとしてゐた。暫くするとホップス爺さんは、不審さうに、新聞の上からセドリツクを見た。

「やあ！」

と又いつた。この時に、セドリックは一心に氣を落ちつけて、かういつた。

「をぢさん。こゝできのふの朝話した事を覚えてゐる？」

「さうさ、たしかイギリスの事だつたかな。」

「うん、それからね、そらあの時メリーがこゝに來た時に話してた事を覚えてる？」

「さう／＼ギクトリアの事や、貴族の事などを話してゐたね。」

「それから、ねえそら……ねえ」と、セドリックは少しもじ／＼しながら

「それからね、それからあの伯爵の事、あれを覚えてゐる？」

「どうして？ 覚えてるよ、あいつらの話をしたつた。」

セドリックは額の處に、ふさ／＼してゐる毛の根もとまで眞赤になつた。これ程、間のわるい氣のした事はないと思はれた。そしてホップス爺さんの方でも、いくらか間のわるい氣がしてやしないかと、心配した。

「をぢさんはね、伯爵の奴らなんかには、をぢさんとこのビスケットの箱になんか腰もかけさせないつて、さういつたつた。」

と、又言ひ足した。ホップス爺さんは氣ほひ立つて、

「あたりまへだ、そこなんかに腰でもかけようもんなら、どんな目にあはされるか知れたもんぢやない。」

といつた。

「ね、をぢさん。でもね、この箱に腰をかけてるのは伯爵なんですよ。」

と、セドリックがいつたのを聞いて、ホップス爺さんは椅子の上で飛び上つてしまひさうになつた。

「何だつて？」

とびつくりした聲を出した。セドリックは遠慮した様子で、

「だつて、僕はその伯爵の一人なんだよ。おきそれになるのです。嘘ぢやないの。」

といった。ホップス爺さんはびつくりした。それから急に椅子から立つて寒暖計を見にいった。そして振返つて、セドリックをしげ／＼見ながら、

「暑さに當てられたね。今日は暑いんだからな。どんな氣持だい？ どのか痛いかい？ いつごろからそんな氣持がするんだい？」

と立てつゞけに聞きながら、セドリックの髪の中に、その大きな手をつき入れて、様子を見るのだつた。さうされるとセドリックは、ます／＼さまりが悪くなつて、心が臆してしまふのだつた。

「ありがたう、をぢさん。いゝえ何ともありませんよ。頭が痛いんでも何でもないので。ね、をぢさん、その事を話すのは、僕もいやなんですけれどね、昨日メリーが招びに來たのは、その事だつたんですよ。ハギツシヤムさんが家のお母さんに、その事を言ひに來たのです。その人は辯護士です。」

ホップス爺さんは、そこでどつかりと椅子に腰をおろして、ハンケチを出して頻

りにその額を拭き始めた。

「これはお前かおれかのどつちかど、暑さにあてられたに違ひないんだ。」と、大きな聲を出していった。

「いゝえ、そんな事はありやしません。仕方がないから二人とも、締めさせう。ね、ホップスをぢさん。だつて、わざ／＼イギリスからハギツシヤムさんが、僕のおぢいさんのお使ひでその事を言ひに來たんですもの。」

ホップス爺さんはあつけにとられた様子で、セドリックの本氣になつてゐる、子供供した顔を見つめてゐたが、

「それは誰なんだい？ そのお前のおぢいさんといふのは。」と聞いた。

セドリックはポケットの中にその手を入れて、まだよく書けない字で覺束なく書いた、おぼえの紙切れを出して、

「僕はちやんと覚えられなかつたので、この紙に書いて来たのです。」
 といひながら、ゆつくりした調子で、ドリンコート伯爵、ジョン・アーサー・モリ
 ノオエロルと読み上げた

「これが僕のおぢいさんの名なのですつて。おぢいさんはお城に住んでゐてね、こ
 のお城を二つも三つも持つてゐるんだつて。僕のお父さん、死んだ僕のお父さんは
 その人の一番末の子供で、お父さんが死ななければ僕は伯爵でも何でも無いんだし、
 それからお父さんの兄さんが二人とも死んでしまはなければ、僕のお父さんも伯爵
 ではないのだつたけれどもね、みんなが死んでしまつたので、僕だけが残つてゐる
 から、他に誰も子供がゐないから、僕が伯爵にならなければならぬんだつて。そ
 れだもんで、おぢいさんが僕をイギリスに來いつて、迎ひによこしたのですとさ。」
 ホップス爺さんは、前よりもますます息づかひを激しくしながら、一層のぼせ上
 つたやうになつた。そして額から禿げた頭の處を、しつきりなしに拭いてゐた。

その中にやつとの事、この思ひがけない事が、本當に起つたのだと、少しづつわ
 かつて来たのだつた。しかし、今自分の眼の前のビスケットの箱に腰をかけてゐる
 小さい子の子供らしい目が、無邪氣な、心配さうな様子をしてゐるのを見ると、昨
 日と少しの變りも無いと思はれる。やはり昨日見た通りに、紺の著物を著て、赤い
 ネクタイをした姿の美しい快活な、しつかりした子供がゐるだけで、貴族になつた
 といふやうな事は、どうしてもすぐには呑み込めないのだつた。
 それにセドリックの話をする様子が、いかにも罪がなく、單純なぐあひで、セド
 リック自身は、それを別に大した事だとも思つてゐないやうであつた。ホップス爺
 さんは一層びつくりしたのだつた。
 「それで、お前の名は……何といふのだい？」
 と聞いた。

「僕の？」 ロード・フロントロイ・エロル・セドリックといふのですよ。ハギツシャ

ムさんといふ人が、さういひました。僕がお客の部屋にはひつて行つたら、この方がロード・フォントルロイでいらつしやいますかと言つたのです。」

「ほお、おれは、あきれちまつた！」

これは、ホップス爺さんが非常にびつくりして昂奮した時に、きつと出る言葉だつた。今この場合には、さし當り他に何とも言ふ言葉が出て來なかつたのだつた。セドリックはそれを正當なびつくりし方だと思つた。といふのは、ホップス爺さんを、ふだんから非常に尊敬してゐるので、その言ふことが、何でももつともには思はれる。だつた。世間の人のつきあひの様子を、まだちつとも知つてゐないセドリックにとつては、ホップス爺さんが、あんまりちゃんとした禮儀を守る人柄でない事などは、わかりやうはないのであつた。それは自分のお母さんに比べると、ホップス爺さんには變な處があるといふ位の事は知つてゐた。けれどもお母さんの方は女なので、女といふものは、男とはまるで違つてゐるものだといふ理窟を、自分ひ

とりでこさへてゐたのだつた。

それで、此時も何だか心にしつくりしない心持がして、ホップス爺さんを見てゐたが、そのうちに、

「イギリスは随分遠いんだつてね。をぢさん。」

ときいた。

「大西洋つて、でかい海を渡つた向うだ。」

と、ホップス爺さんがいつた。

「それがいやなんだ。僕はひよつとすると、いつまでも逢へないと思ふのですよ。ね、をぢさん、僕はそれを考へるといやで仕方がないのです。」

「親友にも別れないではゐられないからなあ。」

とホップス爺さんがいつた。

「さうだねえ。をぢさんと僕とは昔つから親友だつたんですねえ。」

「お前が生れるとすぐからだよ。何でも、初めて抱かれて町に出て来たのは、お前が生れてから、六週間ばかりしての事だつたよ。」

セドリックは、吐息をついて、

「お、その時分には、僕は伯爵なんかにならなければいけないつて、思ひもしなかつたんだが！」

「だが、それを断るわけにはいかないのかい？」

「どうもさうは出来ないやうですよ。お母さんがね、お父さんが生きてらしつたら、やつぱりさうさせようつてお思ひになるだらうつて言つたんですもの。でね、僕はどうしても伯爵にならなければいけないつていふんなら、僕がしようと思つてる事が一つあるんです。本當にいゝ伯爵にならうと思ふの。壓制家にはなるまいと思ふんです。でね、もし又アメリカと戦争でもしようといふ事があつたら、僕は一生懸命になつて止めますよ。」

セドリックはホップス爺さんと長い事、むきになつて話し込んでゐた。初めびつくりした心持がだん／＼なほつて来ると、ホップス爺さんは案外さつぱりして、仕方のない事だと思つて了つたやうであつた。それでセドリックが「さやうなら」をして歸るまでに、いろ／＼な事を話したのだつた。セドリックはいろ／＼聞かれる事に向つて、ほんの少ししか返答をする事が出来なかつたので、自分で考へてるやうに理窟をつけて、いろ／＼と話してゐた。そのうちにだん／＼調子がついて来て、侯爵、伯爵の事や、その貴族の格式について、講釋をしたが、それをハギツシヤムさんにでも聞かせたら、びつくりしてあきれしてしまふやうな事であつたらう。

しかし、ハギツシヤムさんがびつくりした事は、他にいくらでもあつた。それは一生イギリスで送つた人なので、アメリカ人とアメリカ人の氣質をちつとも知つてゐなかつた故だつた。自分の職業で、ドリンコート家には、四十年の間關係があつた。そして、この古い歴史のある大貴族の家についてゐる、非常な財産や、格式

についてはよく知つてゐた。それでこの人はもともとから冷静な事務家らしい心だけではこの近い未来に、その一切のものを愛撫いで、その主人になる——未来のドリノコート伯爵になる運命を握つた、この小さい子供を、何の氣なしには見てゐる事が出来なかつた。

このハギツシヤムさんは、その長男も、次男も、二人とも老伯爵の心に叶はずにゐた事、キャブテン・エロルがアメリカの婦人と結婚をしたので、伯爵がひどい怒りやうをされた事、そして今でも前にかはらず、そのキャブテンのしとやかな未亡人をどんなにか嫌つてゐるので、其人の話になると、いつでも聲を荒らげてものを言ふ事、さういふ事をすつかり知つてゐた。老伯爵は、ふだんキャブテン未亡人は、キャブテン・エロルが伯爵家の子息だといふ事を知つてゐたので、自分の息子を欺して結婚するやうにしたアメリカ娘だと思ひ込んでゐた。ハギツシヤムさん自身もそんな事位はありさうに思つてゐたのだつた。この人は、ふだん、随分と手前勝手

な、性のよくない、慾の深い人に出逢ふことが多いのだし、その上アメリカの人に對しては、餘り好意を持つてゐなかつたので、かういふ風に思ひ違ひをするのは決して無理ではなかつた。そこで初めてその人に逢はうとして行く時に、自分の馬車がある場末の賤しい町にはひつて行つて、安つばい、小さな家の前で止つた時には全くぎよつとしたのだつた。かりにも、この次のドリノコートの城主にならうといふ人が、町の角にけちな萬屋の店があるやうな、みすぼらしい町の家で生れて生ひ立つたといふ事では、不釣り合ひがひどすぎると思つたのだつた。それでその生れた子といふのはどんな子だらう。そのお母さんの人柄はどんなだらう。それを見てどんなに驚かなければならないかと思ふと、二人に逢ふ事がいやだと思つて、躊躇する氣味あひだつた。と言ふのも、自身がそれまでに永い年の間、その大家に就いての公務を引受けて處理してゐたので、しぜんその家に肩を持つ心持で考へられるので、亡くなつた夫の生れた家の事も、その家についてゐる尊嚴に就いても、ちつ

とも考への及ばない野卑な、貪慾な婦人と談判をしなければならぬ事になつたのは、迷惑な事だと思はれたのに違ひない。

この経験の多い、年とつた辯護士は、生來冷靜で、鋭敏な人ではあつたが、高名な、舊家のドリンコート家に對しては、非常な尊敬の心を持つてゐた。それでメリに案内されて、その家の客間に通つた時に、氣をつけてどんな様子かと思ひながら、その部屋の中を見まはした。處が、質素な部屋のつくりやうはしてあつたが、案外にさつぱりして居心地のいい様子にしてあつた。自分が立つてゐる周圍には、安つばいけばくしい置物だとか、額だとかは一つもない。壁にかゝつてゐる二つ三つの額は、品のいいものばかりで、その他には、婦人がその手でしたらうと思はれる、綺麗な飾りつけが少しばかりあつた、それだけである。それを見てハギツシヤムさんは、「まづこれ位なら、この家に住んでゐる人も、それ程ひどい人ではあるまい」と思つたが、「しかし、これは多分キャプテン・エロルが立派な嗜みの人だから、

その故でかうなのかも知れない」と心の中でさういつてゐた。けれども、そのうちにエロル夫人が部屋の中にはひつて來たのを見た時には、いかにもその婦人の様子が、この部屋のまはりとはびつたり調和がとれてゐるのに氣がついたのだつた。

それでもしハギツシヤムさんがしつかりした沈著な老人でなかつたらば、夫人を見た時の驚いた心を、きつとその顔に表したにちがひない。質素な黒の喪服が、すらつとした姿にしつくりとよく似合つた様子は、この人が七つにもなる子供の母だとは思はれない、まだ若い生娘と見える程だつた。夫人は美しい悲しさうな若々しい顔をしてゐた。大きい褐色の眼には、静かな、純潔な心が表れてゐた。この萎れた様子は、その夫を亡してからこの方、ずうとこの人から消えてゐないのであつた。

セドリツクはこの様子を始終見馴れてゐた。そのお母さんの顔から、この悲しさうな影が消えて、さえくゝとなるのは、自分と一緒に遊ぶ時とか、話しをする時と

かだけの事で、さういふ時に自分が何かつい思はず面白い事をいつたり、新聞を讀んで覺えた事とか、ホップス爺さんの話で聞いた事から引き出して來て、ませた言葉を使つたりした時ばかりの事だつた。

セドリツクは、長い綴りのむづかしい言葉を使ふ事がすきだつた。それを使つた時に、お母さんがおもしろさうになさるのは嬉しいのだつた。けれども、自分では一生懸命でいつてる事であるのを、他の人がそれををかしがつて笑ふのが、どういふわけかわからなかつた。

で、ハギツシヤムさんはさういふ人だつたので、人を見る事は上手だつたから、セドリツクのお母さんを一目見るとすぐ、老伯爵がエロル夫人を下賤な貪慾な女だときめ込んでゐるのは、全くの間違ひであつたといふ事がわかつた。このハギツシヤムさんは一生獨身でくらしして來た人なので、女の事についてはよくは知らなかつたけれども、この聲のかわゆい、悲しさうな目をしてゐる、若い美しい婦人が、キ

ヤブテン・エロルと結婚したのに就いては、その心の優しさを盡してその人を愛したからで、それが伯爵家の子息だからといふやうな、利慾の上から考へた事では決してないといふ事がわかつた。それでこれなり談判をするについても面倒な事はあゝるまいし、この人の子供であれば年のいかないロード・フォントルロイも、ドリンコート家にとつて恥かしいやうな子ではあるまいと思ふやうになつたのであつた。キヤブテンは随分立派な人であつたのだし、この婦人もかう美しいのだから、その子も醜い事などはあるまいと思つたのだつた。

それで、最初にまづエロル夫人に突然訪ねて來たわけを話すと、夫人はひどく顔色を變へた。

「まあ、さういふ事でございますか？ それなら、私は子供を手離さなければならぬのでございませうか？ あんなに私を思つてくれますのに！ これまでは、あの子を育てますが、何よりも務めだつたのでございすのに。あなたには、私

にとりまして、あの子がどれ程大切な子でございますかお解りになりますまい！」
 といった、夫人の聲がふるへてゐたが、それがいかにもかわゆく思はれた。その夫
 人の眼には涙がいつばいたまつてゐた。で、その辯護士は、咽に何かひつかゝつた
 やうに咳をしながら、かう言つたのだつた、

「少し申しにくい事ですが、奥さまに對して、ドリンコート伯爵はひどく……實
 は……打ちとけないお心持でございます。御承知のやうに、あの方は
 甚く頑固でございますして、一度思ひ込みますと、そこがどうも解け難いのでござい
 ます。特別、アメリカとアメリカ人が、ひどくお嫌ひなのでして、實はキャプテ
 ン・エロルの御結婚の事については、全く大變な御立腹でございました。私も、そ
 れで、全く面白くないお話の代理人になつてまゐる事は、迷惑だと思つて居ります。
 處で、手短かに申し上げますと、伯爵は奥さまとはお逢ひにならない事に、定めて
 いてなのでございます。たゞロード・フォントルロイだけをお手元に引取つて、御

自分で教育をなさらうといふ、お考へなのでございます。以前から伯爵はドリンコ
 ートの城が大變御氣に叶つて居りますので、重にそこお住ひになつて居ります。炎
 症の痛風が御持病で、いつも惱んでおいでな爲めに、ロンドンには殆どお出になる
 事がございません。それでロード・フォントルロイもやはりドリンコートにおいて
 になる事になりませう。奥さまには、コート・ロッヂと申しまして、ドリンコートの
 城から、餘り離れて居りません場所に、お住居を差上げる事になつて居ります。そ
 れからもう一つたおくらし向きの物につきまして、適當な歳入も差上げる筈になつ
 て居ります。それとロード・フォントルロイがそちらのお宅にお出入なさつて、お
 母さまの御機嫌うかがひをなさる事は、御自由といふ事になつて居ります。たゞ奥
 さまがお子さんにお逢ひなさる爲め、お城の方に御出入なさる事は、なさらないや
 うといふ事でございます。お受けあひ致しますのは、決してあなたから全くお子さ
 んを引き離してしまふ事ではないのでございます。それに、さういふ風に定ります

と、ロッド・フォントルロイの御身にとつては、教育の事も、その他の萬事につきましまして、どれ程、お爲めになる事か知れませんが。それでよく御考へになつて見て戴き度いものでございます。

と、かう一通りの話をしたあとで、ハギツシャムさんは、婦人といふものは、すぐ泣き出してしまふものだと思ひこんでゐたので、こゝで泣き出されては迷惑な事だと思つて、エロル夫人の様子をそつと見てゐた。處がエロル夫人には、さういふ様子は少しも見えなかつた。椅子から立ち上つて、窓の處に行き、暫くこちらに背を向けて立つてゐた。それはこの突然起つて來た思ひがけぬ事に對して、心を静めようとする爲めだと思はれた。やがて、

「キヤブテン・エロルも、大變ドリンコートを懐しがつておいででした。始終、お國の事といふと、どんな事でも懐しがつておいでなので、お家を離れてゐるといふのを、いつも心の重荷にしていらしたのです。特別お家の御身分の事を大切に

思つていらつしやいました。御自分の子供を、お家の方に歸らしてお國の立派な御殿を見せ、その上未來に受けつく可き爵位に相當するだけの教育を受けさせたいといふお心は、もしキヤブテン・エロルが今生きておいででしたら、必ずその願ひになさる事でございますかと、私は信じます。」

といつて、振り返つて机の處に戻り、落ちついてハギツシャムさんの顔を見た。

「亡くなつた方が、そのやうにしたいと思ひなる筈の事でございますから、私にとりましては、子供の爲めに、それが一番よろしい事と考へられます。子供にとりましては幸福な事でございます。それで、伯爵はまさかにあの子に私を嫌ふやうなおしつけ方はなさるまいと存じます。もし、さういふ風になさいますとすれば、必ずあの子を悪くなさる事になりませう。あの子は、温良で忠實な性質でございます。長い間、私と逢はずに居りましても、私を思ふ心が變るやうな事はございません。それですら時々逢ひにまゐる事をお許し下さるといふのでございませば、

その上に何も申し分はございません。」

と、何気ないやうに言つた。その言葉を聞いて、ハギツシヤムさんは、「これはちやんとした心持の婦人だ、自分勝手な事は少しも考へず、別に自分の都合からの要求はちつともしない、と思つたのだつた。」

「これは奥さまのお考へには全く感服致しました。たゞ／＼お子さんの行末の爲めばかりを御心にかけておいでなさるのは、ロイド・フォントルロイも、年をおとりになりましたら、さぞ感謝される事でございます。これからはロイド・フォントルロイのお身の上につきましては、お幸になるやうに、伯爵も十分力をお盡しになる事でございます。そこは御安心なさる事が出来ようかと存じます。伯爵は必ずあなたに代つて、どこまでもフォントルロイを保護なさる事はおうけあひ致して置きます。」

といつた。エロル夫人はそれを聞いて、その優しい心が思ひ迫つたやうになり、聲をふるはせながら、

「どうぞ、お祖父様がセディイをかわいがつて下さいますとよろしいのでございますが、あの子は氣の優しい、人なつこい子で、これまでは優しくしてばかり取扱はれて居りますので……」

といつた。ハギツシヤムさんはそれにはすぐはつきりした返事が出来ないで、咳ばかりをしてゐた。その心の中には、どうもあの病氣持ちの、痲痺のひどい伯爵が、子供をかわいがるなどといふ事などは、あらう筈がないと思つてゐた。それでも自分のあとを繼ぐ筈の子供だから懐かして置かうと思はれるかも知れないし、もしひよつと氣に入りでもされたら、そこは案外、人に對して自慢の種にされるかも知れないと思つたのだつた。それで、

「ロイド・フォントルロイは必ず面白くお暮しであらうと思ひます。それであなたに御近くにお住ひなるやうになさつたといふ事も、つまりはフォントルロイのお心

持をお察しになつての上の事でございます。

と、うまく返事をした。ハギツシヤムさんもさすがに、伯爵が言はれた通りの事を、そのまゝでは口に出せなかつたので、それが柔かに聞えるやうに氣をつけて言つたのであつた。處でエロル夫人が、下女のメリーを呼んで、その子を捜して来るやうに言ひつけた時に、メリーがセドリツクの居處をいつた時には、この客の老紳士は改めて軽く驚いた。

「えい、すぐ見つかりますとも奥様。いつものやうに、今時分にはホッブスさんとこの、帳場のわきに腰をかけて、政治の事を話しておいでになるか、それでなければ、シャボンや、蠟燭や、馬鈴薯の置いてある中で、大喜びをして遊んでいらつしやるにちがひありません。」

とメリーがいつたのだつた。その言葉についてエロル夫人が、

「そのホッブスさんといふ方は、セデイが生れた時からかわいがつて下さる方で、

それはお親しく致して居るのでございます。」
といつた。

ハギツシヤムさんは、此時、自分の馬車がこの町の角を曲つた時に、ちらと目についた林檎や、馬鈴薯の箱だとか、その他の種々雑多のものが、積み上げてある小さな店の事が心に浮んで來た。それでその心に又「疑はしい」といふ感じが起つて來た。イギリスでは、ともかく紳士と言はれる程の家に生れた人が、萬屋の亭主と親友になるといふやうな事は、ない事である。「さういふ事を聞くと、如何にも不思議に思はれるのであつた。それで、このエロル夫人の生んだ子が、賤しいといふわけを知らない育ちで、さういふ下賤いものと交際をする事が好きだつたら、それを困つた事だと思つたのである。

伯爵が何よりもにが／＼しいと思つてゐられた記憶は、その上の二人の御子息が、二人とも賤しいものと交際をする事が好きであつた、その事であつた。それで

今度のこの子が又もしひよつと、その父の貴族らしい心持を受けつがずにゐて、伯父たちの癖でも受けてゐるのではないかと、少し心配をし始めたのであつた。

で、エロル夫人とのさういふ話のうちには、ハギツシヤムさんはこの事を考へて不安に思つてゐた。そこに戸が開いて、その子供がはひつて来た。ハギツシヤムさんは初に戸が開いた時には、なぜだか、その子の顔を見たくない氣がして、少し心がためらつてゐた。だが、兩手を擴げて迎へ入れた母の方に、馳け寄つたその子を見た時に、ハギツシヤムさんの心が感動したその心持は、ふだんこの人の落ちついた、ものに動じない氣象を知つてゐる人が見たらば、妙に思ふ事であつたらう。

處で、これ程までにハギツシヤムさんの感情を動かしたといふのは、それは一つの反動であつた。一目見て、その子がこれまでに見た事がないと思つた程、立派な子供だつたので、その心に起つた感情であつた。全く美しい子供だつた。そのからだつきがしつかりしてゐて、それでゐて撓かである風から、幼顔では、るが雄々し

く、首をしやんと舉げて歩く動作が、いかにもしつかりしてゐる様子、すべての事が、一つ一つ、亡くなつた父のキャブテン・エロルにそっくりだつた。それは不思議な程、似てゐるのだつた。

それから髪は父に似て金髪で、眼は母そっくりの褐色であつたが、その眼のうちには、悲しさうな影や、氣の臆した様子などは、ちつとも見えなかつた。たゞ罪のない子供々々してゐるうちに、きりつとした目をしてゐる。これはその生涯のうちに、何にも怖けたといふ事がなく、ものを疑つたといふ事のない心持が表れてゐるのだつた。

ハギツシヤムさんは、それでこの子を實に上品な、立派なものだと思つて感動したのであつたが、母のエロル夫人に向つては、たゞ簡單に太い聲で、

「では、この方がロード・フォントロイでいらつしやいますか。」
と、これだけ言つたのであつた。

それから後になつて、この子を見てゐると、見てゐる程、思ひがけない事があるばかりであつた。ハギツシャムさんは、本國のイギリスで、どつさりの子供を見て知つてゐたが、それには、嚴格に鄭重にお抱の家庭教師から躰をされてゐる、立派な家庭の器量のいゝ子供たちをいくらも知つて居た。そのなかには内氣な子供もあるし、活潑な子供もゐたのだが、その子たちの近づきにまでなつて、改めて子供に氣が引かれるといふ氣持になつた事はこれまでにない事であつた。この年をとつた、生真面目な、四角張つた辯護士のハギツシャムさんのやうな人には、子供の事などについては、特別に興味が起る事はなかつたのであつた。

ところが、このセデイばかりは、平生のハギツシャムさんと別の人のやうになつて、ひどく氣を引かれてしまつたのであつた、どういふわけだつたらう。それはこの子供の運命が、自分と密接な利害の關係があるからといふ爲なのだらうか。それとも、の理由がある爲なのか。ともかくそれはわからないが、知らず知らずのうち

に、この子に氣を引かれてゐるのだつた。

セドリツクの方では、さういふ風に氣をつけられてゐるなどといふ事は少しも知らないで、ふだんの通りにふるまつてゐるのだつた。初めてハギツシャムさんに紹介された時には、友達のやうに握手をした。そして毎日ホップス爺さんと話をするのとそつくりの調子で、聞かれる事に對して、すつかり返事をしたのだつた。その調子には、はにかんだ様子も見えず、さうかといつて出しゃばりでもなかつた。それでハギツシャムさんが母と話をしてゐる間は、靜かにしてゐたが、その様子がまるで大人のやうな處があるのだつた。

「このお子さんは、餘程、ものがよくわかつておいででございすな。」
と、ハギツシャムさんがエロル夫人に言つた位であつた。

「さうでございす。私もいくらかさう思つて居ります。もの覺えもよろしい方でございすし、それに、重に年のいつた方ばかりとお話ししますので、その聞き覺

えや、それから読んで覚えましたがむづかしい言葉をつかひますので、ませた事を申します癖がございませぬので、それはをかしい事がございませぬよ。おつしやる通りでございませぬが、やつぱりほんの子供らしい遊が大好きでございませぬ。」

と、お母さんがいつた。

その後、ハギツシヤムさんは二度目にセドリツクを見た時に、その本當に子供らしい處を見て、エロル夫人の言つた言葉を思ひあはせたのだつた。

ハギツシヤムさんの馬車が、町の角を曲る時に、何か息せき切つて騒いでゐる、小さい子供の一群が目にはひつた。そのなかの二人が、今、馳けつくらをしようとする處だつた。その二人のうちの一人は、未來の伯爵になる人であつたが、友だちに負けずに、大騒ぎをしてゐた。その時丁度、相手の子と並んで立つて、赤の靴下をはいた足を、前に一足踏みしめてゐる處だつた。

音頭取りの子が、大きな聲で、

「い、かい。一で用意だよ……二でスタートだよ、三、そろ！」

と相圖したのだつた。

ハギツシヤムさんは、我知らずに、馬車の窓から外に首を出して、氣を取られたやうに、その勝敗を見入つてしまつてゐた。その相圖に乗つて馳け出した、若様の見事な赤い脛が、膝までの太いズボンの下で躍り上つて、宙をとぶやうに馳けて行くのを見入つた時のやうな心持は、これまでに覚えのない事だつた。セドリツクは小さい両手をしかつりと握つて、風に逆らつて顔をきつと上げながら馳けてゐた。それでその金髪が、浪をうつやうに後に吹き流されてゐた。

仲間の子供たちは、夢中になつて踊りながら、金切り聲をほり上げて、

「フレイ、セト・エコル！ フレイ。ビリイ・ウリヤム！ フレイ、セデイ！ フレイ、ビリ！ フレイ、フレイ！——」

とどなつてゐるのだつた。ハギツシヤムさんは獨語で、

「あの子の方がきつと勝つな。」

といった。その赤い脛の跳びあがりぐあひや、仲間の子の叫び聲や、赤い脛より、ちよつと後れてはゐるが、どうして馬鹿には出来ない程の、ビリイの蒼色の脛が、夢中になつて競争してゐる、さういふ事が、このハギツシヤムさんの心持に妙な昂奮した感情を起させたのであつた。

「たしかに、たしかに勝てばいゝが。」

と、ハギツシヤムさんは思はず、口に出して獨りごとをしてしまつたから、そのあとで、人が見ても居なかつたのに、間の悪さうな咳拂ひをしたのだつた。

丁度その時に、跳ねたり躍つたりしてゐた子供たちが、一時に関の聲をあげた。と思つて見ると、未來のドリントン伯爵は、最後の一躍をして、町角の瓦斯の柱の處に行きついたのでつた。それがあとから息を切らせて、やはりその柱に、ビリイが飛びついたのより二秒だけ前だつた。

「ばんざあひ、セデイ・エロル！ フレイ、セデイ・エロル！」

と、仲間の子供がはやし立てた。それを見て、ハギツシヤムさんは馬車の窓から首を引つこめた。そして、微笑しながら、後の方に寄りかゝつた。

「ブラオー！ フォントルロイ。」

と、いつた。

ハギツシヤムさんの馬車が、エロル夫人の家の前に著いた時に、勝つた方と負た方との二人が、わやく／＼言つてゐるの一群子供たちに後から押されるやうになつて、そこにやつて来た。セドリツクはビリイ・ウキリヤムと並んで歩きながら、頻りに何か話しかけてゐるのだつた。その顔は上氣して赤くなつてゐるし、房々した卷毛は、汗ばんで額にひつついてゐる。両手をポケットのなかに入れてゐながら、その相手の負けた方の子供に向つて、

「僕が勝つたのはね、ね君、僕の足の方が君よりか少し長いからなのだよ。僕には

さう思へるんだよ。僕は君よりか三日早く生れてゐるだらう。それだけ僕がとくをしてゐるのだよ。ね君、僕の方が三日早く生れたんだもの。」
 と、その子が競争にまけたのを慰めるやうに云つてゐた。さう言はれて見ると、負けた方のピリーも、だん／＼心持がなほつて来て、しぜんと笑ひかけて来てゐた。そのうちには、だん／＼自分の方が早いやうな氣持がして、えらさうな様子をするやうになつた。

セディ・エロルは、どういふわけか、天性のやうに人のいやな氣持をなほす仕方を知つてゐるのだつた。たとへ自分が勝負をして勝つて、心持が浮き立つてゐる場合であつても、負けた方の人が、自分に比べて見ると心持がよくないだらう、それなら、かういふ風になつたら勝てたらうと思はれるだらう。さう思へたら、いくらか心持が引き立つに違ひない……といふ風に人の心持を思ひやるだけの徳を、この稚い心を持つてゐるのだつた。

その日、ハギッシャムさんは、この馳けつこに勝つた子と、しばらくのあひだ話をしてゐたが、其間に何度となく、そつと忍び笑ひをして、その年とつて骨つぽくなつた手で腮を撫でまはしたのだつた。

ちやうどエロル夫人は、用事が出来たといふので、その席を立つて部屋から出て行つたので、あとはハギッシャムさんと、セドリックと二人だけになつた。その時に、ハギッシャムさんは、どんな事から話し始めようかと、心のうちで思ひめぐらしたのだつた。何れは祖父さんの老伯爵との對面についても、この子の心に用意をさせなければならず、それにセドリック自身にとつて、その身の上に起つたびつくりするやうな變化を、何とかしてよくのみ込むやうにしてあげなければなるまいと思つてゐるのだつた。處が、セドリックの方では、イギリスに行つたあとで、自分がどん

な事に出逢ふのか、どんな家にはいつてどう取扱はれるやうになるのか、そんな事は一切無頓著の様子である。勿論、自分が大切なお母さんと一緒に住まないやうになるのだといふ事さへ知らずにゐるのだつた。それは餘りびつくりする事が多いので、この子の爲めになるまいから、だん／＼と知らせるやうにした方がよからうといふ、エロル夫人の注意があつたからなのである。

それで、この時、ハギツシヤムさんは開け放した窓の處にあるアームチェアに腰をかけてゐた。それに向つて、も一つそれよりも大きな椅子があつた、それにセドリツクは腰をかけて、ハギツシヤムさんの方を見てゐた。この大きい椅子の上に、小さな子が深々と腰をかけて、房々とした頭を背のクッションにもたせ、足を組みあはせて、両手をポケットの中に、ずつと突込んでゐる様子は、全くホツプス爺さんそつくりの様子であつた。お母さんがその部屋にゐるうちから、セドリツクは頻りとハギツシヤムさんの顔を見てゐたのだつたが、お母さんが席を立つたあとでも、やは

り、何か様子ありさうに、その顔を見つめてゐた。

エロル夫人が出て行くと、ちよつとの間話ごとされた。セドリツクはハギツシヤムさんの様子を、ハギツシヤムさんの方でもセドリツクの様子を見てゐた。それでハギツシヤムさん位、世間に馴れた年とつた人でありながら、この時ちよつとの間は、この馳けつこをして勝つたり、それから又椅子に腰を深くかけると、その先きが下に届かないやうな短い足に、短い膝つきのズボンと赤い靴下をはいてゐる、稚い子に、どう話しかけていゝのか考へがつかないのだつた。そのうちにセドリツクの方から突然話しかけたので、やつとほつとしたのだつた。

「あなたは知つてゐますか？ 伯爵つてどんなものか、僕は知らないのです。」

「さうですか？」

と、ハギツシヤムさんがいふと、セドリツクは、

「え、知らないのです。けども、僕見たいに今に伯爵になる者は、それを知つて

なくつちやいけませんね？ さうでせう？」

「さうですね。さうですとも。」

と、ハギッシャムさんが言った。するとセディは丁寧な調子で、

「僕にそれをせちゆめいして下さいな。誰が伯爵にしてくれるんですか？」

さう聞かれて、ハギッシャムさんは、

「初めには、皇帝とか女皇とかが、その伯爵をお授けになるのです。大抵は何か皇帝に對して勳功があつた人とか、大事業をした人とかが、伯爵の位を貰ふやうになるのですな。」

といつた。さうすると、

「あゝ、それでは大統領と同じ事ですね？」

とセドリックがいつた。

「左様ですか！。あなた方の大統領が選ばれるのは、さういふ譯からですか！。」

「えいさうです。良い人で、いろんな事を知つてると、大統領に選ばれるのです。それから炬火の行列をしたり、樂隊がはやしたり、みんなが演説をしたりするので、僕はその大統領になりたかつたのです。」

此時セドリックは、自分が伯爵になりたくなかつたといふ事をもし知らせ、ハギッシャムさんにいやな氣持をさせてはいけないといふ心配が、心に起つたので、いそいでかういふ風に言ひかへた。

「僕だつてね、その伯爵といふものを先から知つてゐたら、それになり度かつたかも知れません。けれども知らなかつたのですから。」

といつた。

「さう、それは大統領になるのとは、少し違つてゐますな。」

と、ハギッシャムさんがいつた。

「違いますか？ なぜですか？ どんな風に違ふのです？ 炬火の行列なんかも無

いのですか？」

ハギツシャムさんは、それで自分の足を組み合せ、ゆる／＼右の手の指先を、左の手の指先に、一つづつ順々に合せて見て、こゝで、この子供に、とくといる／＼の事情を話して聞かせる時が来たと思つた。でまづかういふ風に話し始めた。

「第一それは、伯爵といふものは、大變な立派な身分なのです。」

と聞くと、セデイはすぐそれに口を入れて、

「大統領もさうですよ。炬火が行列になつて五マイルも續くのです。それから花火があがつたり、樂隊があつたりしますよ。ホツプスのお爺さんが僕をつれてつて見せてくれました。」

さういはれたので、ハギツシャムさんは話の腰を折られてしまつて、先きをすぐ續けにくく思つたが。

「で、伯爵といひますと、イギリスではひどく古い門閥なのです。」

と、やがてしてから言つた。

「それは何の事ですか？」

と、すぐセデイが聞き返した。

「門閥といひますのはね、その家が舊くから續いてゐる事なのです。大變舊くからですよ。」

と言はれて、セデイは兩方の手を、尙ほくつと奥までポケットの中に突込んで、

「あゝさう、さうですか、それならあすこの公園の傍にゐる、林檎賣りのお婆さんと、おんなじ事なのです。あのお婆さんはやつぱりきつと古い門……その門閥なのでせうね。もうそれは年をとつてしまつて、どうして自分で歩けるかと思ふ位ですもの。きつとあのお婆さんの年は百位になつてますよ。それなのに、雨が降つてゐる時だつて、やつぱりあすこに出るのです。それはかわいさうなんです。僕のお友達もみんな氣の毒だつていつてゐます。せんの時にピリーウィリヤムがお金を一圓

持つてゐたものですから、僕がね、そのお金が全部になるまで、毎日五錢づゝお婆さんの林檎を買ふ事にしないかつていつたのです。さうすると二十日あるでせう。けれども、ピリーは一週間目に、林檎にあきてしまつたのです。けれどもいゝあんなばいに、その時にとうど僕がよそのをぢさんに、お金を五十錢貰つたのです。それでピリーの代りに僕が買つたのです。誰だつてあんな貧乏な、古い門閥の人は氣の毒ですよ。そのお婆さんの門閥はね、骨の中まではひつてしまつたのですつて、それだもんで、雨が降るとなほひどくなるのですよ。」

かういはれたので、ハギツシャムさんは、向ひあつてゐる相手が、罪のないまじめな顔をしてゐるのを見て、又何とも言ひやうがなく、手持無沙汰になつてしまつたのであつた。それで暫く言葉が出なかつたがそのうちにかういつた。

「あなたは。よくおわかりにならないと見えますな、私の申し上げたその古い門閥といふ事は、年をとつてるといふ事ではありません。それはね、その家が昔から續

してゐて、世間に名高い家だといふ事です。それは何百年といふ程、その名が人から知られてゐて、その國の歴史にも載つてゐる家の事なのです。」

「あゝ、ではワシントンのやうなのですか。僕なんかでも、もうせんから生れた時から聞いて知つてゐるのですよ。それよりも、その前にも人が知つてゐるのです。ホッブスお爺さんが、ワシントンの事は、いつになつても人が忘れないつていつてました。それはあの獨立の宣言や何かがあるからです。それと七月四日の獨立祭もありましてね、随分偉い人ですよ。」

「いつたい、第一世のドリンコート伯爵は、今から四百年前に、その位を授けられた方でございます。」

と、ハギツシャムさんは、厳格な言葉つきで、又自分の方の話を始めようとした。

「あゝ、それでは随分昔の事ですね。その事を僕のお母さんに話したのですか？ 話すときつと面白がつて聞きますよ。それは、お母さんは、珍しい話を聞く事が大

「好なのですよ。今にこゝに來たら、あなたと二人で話して上げませう。それから、伯爵を授けられてから、どうしたのです？」

「それで、その四百年の間に、伯爵家の御主人は大方どなたもイギリスの政治を助けておいでなさいますし、昔の大戦争に出られた強い方もあります。」

「僕も、さういふ事を爲て見たいのです。僕のお父さんは軍人でしたつて、それで随分強かつたのですつてね。ワシントンのやうな人だつたのですよ。だから、もつと死なずにいらつしやると伯爵になつたかも知れませぬね。伯爵が偉い人だつて、さうなら僕は嬉しいのです。偉い人だと、それは爲になるのですものね。せん時分には、僕はね、それはこわかつたのですよ。暗い處なんか……でもね、革命戦の時の軍人の話や、ワシントンの事なんかを考へてゐたら、もうおきなほつてしまつたのです。」

それで、ハギツシャムさんは、いつものゆつくりした様子でゐながら、少し顔をし

かめて、鋭い目をして、セデイを見つめてゐたが、

「伯爵になると、もつと他にいゝ事があります。伯爵は、どの人でも大抵、大變な金持なのです。」

といつた。そしてこの子が、金銭の勢力といふものを、どれ程知つてゐるだらうと思ひながら、氣を付けてその様子を見てゐた。セドリックの方では、それについては何の氣もつかない様子で、

「お金があると随分いゝのですね。僕も、お金がどつさりあるといゝと思ふのですよ。」

と、いつた。

「さうですか？ それはどうしてですか？」

と、ハギツシャムさんが聞いた。

「どうしてつて、お金があると、いろんな事が出来るのですもの。僕にお金があつ

たら、あの林檎屋のお婆さんに、その露店の覆にするテントや、小さいストーヴを買つてやりますし、それから雨の降つた日には、いつでもお金を一ドルづゝやるやうにしますし、さうすればあのお婆さんが、店を出さないでも家にゐられるでせう。それから、あゝ……腰掛を一つ買つてやります。それがあると、今程骨が痛くはないものね。そのお婆さんの骨は僕たちの骨とちがつて、動くし痛いのですつて。骨がそんなに痛いんだと、それは困りますわね。私たちがだつてね。僕がお金を持つてゐて、さういふ事をみんなしてやつたら、あの骨がよくなるかも知れませぬよ。

で、ハギツシヤムさんは、えゝんと咳拂をした。

「で、お金があつと、他にまだ何をなさるおつもりです？」

「もつといろんな事をしたいです。一番にお母さんに、いくつも綺麗な著物を買つて上げます。それから針さしとか、扇とか、黄金の指輪とか腕輪とか、百科辭書

だとか、もつと、馬車も買つて上げます。自分の馬車があると、乗合ひの出るまで待つてなくつてもすみませぬもの。それから、お母さんがピンクの絹の著物が好きなんだと、それを買つてあげるんですけれども、お母さんは黒いのが、一番好きですから、仕方がないと思ひます。だから、大きな店にいつしよに行つて、いろんなものを見て、そのなかで一番好きだつていふものを、何でもおとりなさいと言ひますよ。それからねデックに……」

「デック？ それは誰です。」

と、ハギツシヤムさんが、聞き返した。

「デックつてのは、靴磨きです。それは好い靴磨きなんですよ。いつでも賑やかな方の町の角のところに立つてゐます。そしてね、僕はもう幾年も前から知つてゐるのです。

もう先、僕がちひさかつた時に、お母さんといつしよに町を歩いてゐましてね、お母さんが、よくはねる綺麗な鞆を買つて下さつたのです。僕がそれを持つてたうち

に、馬だの馬車だのがゐる通りの真中の處に、それがころがつてしまつたので、せう。それだもので、僕は、がっかりして泣き出してしまつたのです……僕はまだちひさくつて、まだ女の兒の著る著物をきてゐたのですもの。その時にね、ヂックは人の靴を磨いてたのでしたつが、「やあ！」といふと、すぐ馬の歩いてる中に馳けていて、その鞆をひろつて、それを自分の著物で拭いてから、「そらね、何でもないよ。」といつて、僕に渡してくれたのです。それだもんで、お母さんが随分喜んで、僕も嬉しかつたのです。その時から僕達は町に行くたんびにヂックに話をするやうになつたのです。ヂックが僕にやあつて言ひますから、僕もやあつて言ふの、それから少しばかり話をするのです。ヂックは商賣がどんなふうだつて事を話すのです。この頃はよくないのですつて。」

といふ風に、この若殿様は、自分だけではいかにも面白さうな考へを、夢中になつて話し出したのだつた。それでハギツシヤムさんは、

「それでは、そのヂックに何かしてやり度いとお思ひですか？」

と、腮を撫でまはしながら、そつと笑ひかけた顔で、聞いて見た。

「え、僕はね。お金を出してジエークの株を買つてやりたいと思ふのです。」

そのジエークといふのは、それは誰の事ですか？」

「ジエークですか。それはねヂックの仲間なのです。それは悪い仲間なんですつてヂックがさういつてました。ちつとも正直でなくつて、あんな奴がゐると、商賣をいつするのに困るつて。いつでも人を欺かすんですつて、それでヂックを怒らせるのです。あなただつて怒るでせう。きつとね。自分が一生懸命に靴を磨いて、でもまづ正直に仕事をするのに、あなたの仲間が、ちつとも正直にしないで、ずるばかりすれば、それは怒るに定まつてますわね。ヂックはみんなの人が好きなんですけれども、ジエークはみんなに嫌はれてるのですよ。だから二度とはジエークのところに人が來ないのです。だからね、僕にお金があつたら、ヂックにお金をやつて

ジエークの株を買つて、それから目につくやうな看板を買つてやり度いと思ふので
す。看板さへあれば、随分いゝ都合だつて、チックか言ふんです。それとね、新し
い著物や、刷毛やを買つてやつて、仕事にとりつかせてやるといふと思ふのです。
チックがね、何だつて初のとりつきが出来さへすればいゝつて、いつてるのですか
ら。」

と、こんな風にチックから聞き覺えた、職人風の言葉を入れ交ぜで、この若殿様が
その子供の世界の話を話す様子は、いかにも無邪氣であつた。そしてセドリックは
その心では、相手の年よりの人が、やつぱり自分の心持と同じに、その話を面白が
つて聞いてゐるに違ひないと、ちつとも疑はない様子でゐるのだつた。

處で、ハギツシヤムさんは、全くその話を面白いと思つて聞き入つて居た。併し、
まあどつちかといふと、チックや林檎屋の婆さんの事などより、セドリックがその
友達の上を思ふ心の濃かな情愛と、夫から自分の事は考へずに、こまかくと人の爲

めに考へてやる、その心持に對して、氣をつけて聞いてゐたのだつた。

そのあとで、ハギツシヤムさんは、

「では、何か……金持ちになつたらば、あなたは自分のもので、買ひ度いと思ひ
のものはありませんか？」

と聞いた。するとフォントルロイはすぐに、

「あるんですとも。けれども、自分の事よりもメリーの妹にお金をやり度いので
す。だつてね、その人は子伊が十二人もあつてね、御亭主は仕事がないのですつて。
いつでも家に来て、それで泣くのです。お母さんが籠に入れて、何かおやりになる
と、もつと泣いて『奥様、何とお禮を申しませう。』つていふのですよ。それからね、
ホップスお爺さんに、金の時計と、金の鎖と、ミヤシヤムのパイプとを買つて上げ
度いと思ふのです。そのあとで、今度は僕をしたい事があるのです。」
といつた。それを聞いてハギツシヤムさんは、「それ」と思つた。

「それは、どういふ事です？」
と聞いた。

「僕はね。僕は共和黨の集りの時のやうに、行列をして見たいのです。僕の友だちのと、僕のと、同じ著物をこさへてね、それで行列をして、訓練するのです。僕が金持だつたら、それが一度して見たいのです。」

かういふ風に、セドリツクがだん／＼と急き込み氣味になつて、話をしてゐる處に、扉があいて、エロル夫人がそこにはひつて來た。

「よんどろこない事で、大變手間どりました、失禮致しました。只今、ひどく困つてゐます人が、私に逢ひ度いと申してまゐりましたので……」
といつて、ハギツシャムさんに挨拶をした。

「お、左様でございましたか。只今、このお子が、お友だちの事や、金持になつたら、その友達にどういふ風の事をしてやらうと、さういふお話の最中だつた處で

ございました。」

「只今臺所にまゐりましたのも、やはりセデイがお友達と申して居ります人でございますが、夫の病氣や、いろ／＼の事で、ひどく困つて居ります様子でございます。」

その時に、セドリツクはその大きな椅子から滑り下りた。

「僕もいつて逢つて來ますよ、あの人の病氣の見舞を言ひ度いのですから。病氣でなければどんなにいゝ人だかわからないのです。いつかもね、僕に木で刀を拵へてくれましたよ。それは何でも出來る人なんです。」

かういつてから、その部屋を馳け出していつた。そのあとでハギツシャムさんは、少し改つた様子になつて、何かエロル夫人に言ひ出さうとした。

ハギツシャムさんは、それでも暫く考へながら、夫人の様子を見てゐた。そのあとで、

私が、ドリンコート城から出發致します前に、伯爵にお目にかゝりまして、こちらにまゐつてからの取計ひに就いて、それ／＼お指圖を受けました。お孫様が今イギリスへお移りになりますに就いても、それと、初めの御對面をなさいますに就いても、出来るだけ喜んでそれをなさるやうに氣をつけて、さういふお心持の出るやうにするがよいといふ、御命令でございました。それで、あのお子の御身分が、この様に變りましたに就いては、お子さん相當の事で、お喜びになるものでございまして、何でも調へて差上げるやうにとの事でございました。それでお望みになる事は、何でも御満足の行くやうに致しまして、さういふ事はすべてお祖父様からの御厚意であると申し上げる筈になつて居るのでございます。それで貧困な人に何かお恵みになり度いといふやうな事が、フォントルロイの御希望でございすならば、それは伯爵の初のお考への中にはなかつた事でございますが、やはり、御満足になるやうに取計らふ方がよろしからうと存じます。それでないと、伯爵の御不満

を受ける事になります。

といつた。ハギツシヤムさんは、この時も率直に伯爵が言つた言葉通りには言はなかつたのであつた。伯爵がハギツシヤムさんに、セドリツクの欲しがるものを買つてやるやうに、それから金もやるやうにと言つたのは、決して美しい愛情から出たのではなかつた。すべて自分の爲めにする處から出た考へであつた。それでもしセドリツクの方が、その性質として人を愛する心の深い、素直な性分でなかつたらば、その事が、この子供の性質に悪い癖をつけた事であらう。

セドリツクの母も、やはりごく素直な心持の人であつたから、さういはれた事に、悪意が交つてゐようとは夢にも考へなかつた。全く子供をすつかり失なくしてしまつた、不幸な老人が、セデイにやさしく、その子の愛情と信頼とを受けようとして居るのだとばかり感じたのであつた。それで今、セデイがああ貧乏で困つてゐる人を助ける事の出来るのは、何よりの事だと思つて喜んだ。自分の子供が受るけやう

91
になつた、不思議な幸運が、他の人に對して慈善をする事が出来るやうになつたのは、實に有難い事だと思つたので、しぜんその美しい、若々しい顔に、嬉しい心持が表れて出て來るのであつた。

「それは誠に有難い御深切でございます。セデイもどんなにか喜ぶ事でございます。其女はブリジエットといふのでございますが、それと、其の夫とはセデイとは大變な仲よしでございますの。その人たちは極く實直ないゝ心の人たちでございますよ。私も、いつももつと何かをしてやりたいと思ふのではございますが、どうも充分に出來ませんもので……その夫の方は、健康の時には、實直によく働く男でございますが、永い間、病氣を致してをりますので、値段の高いお薬とか、その時の著物でございますとか、それに滋養になるものととか、いろ／＼の入費で、すつかり困つてしまつて居るのでございます。夫婦ともお受したものを粗末に致すやうな事は決してございません。」

とエロル夫人がいつた。

それでハギツシヤムさんは、その鋭い顔が、何と判斷していかかわからないやうな表情をしながら、その骨張つた手を胸の處のかくしの中に入れて、大きい紙入れを取り出した。この時にハギツシヤムさんの心の中では、このロード・フォントロイが先づ第一にほしがつたので、それをしてやつた事が、かういふ事だといふ話を伯爵に話したらば、伯爵がそれをどういふ風にとる事であらう。いつたい癩癩持ちで、たゞ世間風な、手前勝手な老貴族の考へからして見たらば、かういふ事をするといふのを、どんな風に考へられる事だらう、とそれを見當のつけにくい事に思つたのであつた。

でエロル夫人に向つて、

「御承知ではありますまいが、ドリンコート伯爵は、餘程御裕福でございますから、フォントロイ様の御望みの事なら、随分御氣儘な事でも、遠慮なしに叶へて差し

上げて差支へかないのでございます。その方が却つて伯爵のお考へにも合ふ事でございます。只今ことにフオントルロイ様をお呼び下さいませんか。さうすれば差當りのとして五ポンド(五十圓)だけ、その困つてゐる者とかの助けになさるやうに、それを差し上げる事に致しませう。」

それを聞くと、エロル夫人は嬉しさうにかういつた。

「五ポンドと申しますと、二十五ドルになります。それはその夫婦のものにとりましては大金でございますよ。思ひもかけない事で、私まで夢のやうでございます。」

ハギツシャムさんは、いつものそつけない笑顔をした。

「いや、あのお子さんの御身分の上には、もう非常な變動が起つたのでして、この以後は大變な権力をお持ちになるやうになつて居るのでございます。」

といつた。

「成程、左様でございますね。けれどもまだあの通りの赤坊で……本當にまだ赤坊

でございますから、私はどういふ風に致したら、その権力を濫用しないで、正當に行けるやうに教へる事が出来ませうか。私はあの子の爲めに誠に心配な事だと存じます。あんなにまだ稚い子供なのでございますもの。」

この言葉を聞いて、流石に、そつけない世馴れたハギツシャムさんも、このエロル夫人の褐色の眼のうちに溢れるやうな優しい心と、その氣遣はしさうな表情とに、心が動かされた様子であつた。それでそつと咳拂ひをして、

「今朝フオントルロイ様にお目にかゝりまして、いろ／＼お話を伺ひました上から考へますと、あの方がドリントン伯爵の位に立たれた後でも、決して、人の事を考へないで、御自分ばかりの爲めに我儘をなさるといふやうな事は、決してなさるまいと存じました。只今はまだ御幼年の事でございますが、さき／＼になりまして、あの貴い御氣質に變りあらうと思はれません。」

といつた。

それから、エロル夫人は、席を立ててセドリックを呼びに行つた。そして臺所からつれて歸つて来る道で、セドリックが頻りに母に向つて話しかけてゐる聲が聲をた。

「ね、お母さん。あの人の病氣はリウマチですつて、ね。ひどいリウマチなのです。それから家の家賃が拂へない事なんかを考へると、そのリウマチが尙ひどくなるんですつて、ブリジエットがさう言ひましたよ。それからね、バットも著物がありさへすれば、小僧にいかれるんだつて、ねえお母さん。」

といふ聲が聞えて来て、それから客間にはひつて来た時のセドリックの顔は、ひどく心配さうであつた。ひどくブリジエットを氣の毒がつてゐる様子で、ハギツシャムさんの方を見ると、

「お母さんが今、あなたが僕を呼んでいらつしやるつて、僕はブリジエットと話をしたのです。」

といつた。ハギツシャムさんは、ちよつとセデイの顔を見つめてゐたが、何だか心で少し度を失つたやうに、もぢ／＼した。全くこのセデイの母がいつた通りに、まだほんの稚い赤坊だと思つたのだつた。で、

「ドリンコート伯爵が……」

と、言ひかけては見たが、どうしても自分の言葉がこの場にはまらぬ氣がして、思はず、そのあとを言つて貰ひ度いと言ふやうに、エロル夫人の方に眼をやつたのだつた。すると、夫人はその子のそばにすり寄るやうにして、如何にもかわいゝといふ様子でセデイを両手で抱へた。そしてかういつた。

「ねえセデイ、その伯爵はあなたのお祖父様なのよ。あなたのお父さんの、本當のお父様なのよ。その方は夫は御深切な方なので、御自分のお子がみんなじくなつておしまひになつたので、あなたを大變かわいゝと思つていらつしやるの。それであなたと仲よしになり度いと思つていらつしやるのだし、も一つは、あなたの嬉しい

と思ふ事をしてやり度いと、お思ひになつてね、あなたの好きなやうに、人にいゝ事をしてやり度いとおつしやるのですよ。お祖父様は大變なお金持なのでね、あなたが欲しがらるものは、何でもしてやり度いといふので、このハギツシャムさんにおことづけになつて、どつさりお金をお届けになつたのですよ。それでね。今、その中のいくらをブリジエットに遣つてもいゝのですよ。あの家の家賃を拂つたり、病氣の人にいろ／＼のものを買つたりする事が出来る程のお金なのだよ。ねえセディ。嬉しいわね。いゝ事ね。」

といつて、まる／＼と肥つた頬にキスをした。その頬は今聞いた事でびつくりして、上氣したやうにぼつと赤らんで居た。それでお母さんの顔をじつと見てゐたが、その目をハギツシャムさんの方に向けると、いきなり、

「それを今、僕に下さいな。すぐ持つていつてやつてもいゝのでせう？ でないと、もう歸つて行つてしまひますから。」

ハギツシャムさんは、その取り出した金をセディに手渡した。青色の新しい紙幣がちやんと揃へて巻いてあつた。それを持つとセディは客間から馳け出していつた。そして息を切つて臺所に飛び込むや否や、かういふ聲が聞えた。

「ブリジエット！ 一寸お待ち！。そらお金をあげるよ。これはあなたのだから、これで家賃や何かをお拂ひよ。僕のおぢい様が僕に下さつた金なんだよ。あなたとミケールにあげるつてね。」

ブリジエットはびつくりした大きな聲を出していつた。

「まあセディ様、どうしませう。これは二十五弗もあるぢやございせんか。奥様は、まあ、どこにいらつしやるのです？」

その聲を聞くと、エロル夫人は席を立つてかういひながら出ていつた。

「では、私が一寸まゐりまして、よく譯を話してまゐりませう。」

そのあと、ハギツシャムさんは一人で客間に残つてゐた。それで窓際の處に立つて

行つて、外を眺めながら、つくづく考へてゐる様子であつた。その心の中に考へてゐる事は、ドリンコート城内で、豪奢を極めた書齋のうちに、贅澤な華かに装ひ立てたなかに取り囲まれてはゐるが、痼病の病氣の惱みと、自分を心から愛してくれるものは一人も無い日を送つてゐる、あの淋しい伯爵の事であつた。伯爵が人に愛されないのは、これまでに一人として人を愛したといふ事の無い爲めである。伯爵は全く傲慢で、我儘で、待て暫しのない人であつた。その一生の間にした事は、ドリンコート伯爵である自分と、自分の快樂とを思ふだけで、人の上の事を考へるなどといふ事は少しもなかつた。自分の富と權力、自分の高名なのと位の高い事、さういふ事から来る一切の利益を、すべて恣に自分の爲めに使つて、放逸と、歡樂を貪る事ばかりをして來たのであつた。さうして歡樂に耽り、放逸を極めた生涯を送つたあとの、つまりは今、年をとつて、病氣に悩むやうになつたのである。その爲めに、だんく痼癖がひどくなり、世間が少しも面白くなくなると、世間の方が

らも嫌はれものになつてしまつたのである。

あれ程、立派な、尊い位の人でありながら、ドリンコート伯爵程、人望といふものが少しもなく、寂しい生涯を送つてゐる老人はないといつてもいゝ程である。それは請待状態も出せば、その城内いつばいの客を集める事は、心のまゝに出来る事である。立派な饗宴も、盛大な狩獵も自由に出来るのであるが、しかし伯爵はさういふ場合に、自分の請待に感じて來た人達が、その心の中で自分が如何にも濫い顔をしてゐる事や、人を嘲つて、心持のわるいもの言ひ方をするのを、嫌ひ恐れてゐる事をよく承知してゐた。この伯爵は残酷な性質で、人に残忍なもの言ひ方をする人であつた。その上、相手がある事を氣にかける性分だとか、思ひ上つてゐる人だとか、怯けたびくびくした人だとかいふと、わざとその人を嘲弄して見せて、不愉快な心持をさせるといふ事が好きであつた。

ハギツシヤムさんは、伯爵のこの残忍な、情愛といふものの全くない性分を、よく

知りぬいてゐるのだつた。それで今、この狭つくるしい、場末のひつそりした町を眺めてゐながら、眞から考へてゐる事は、今の前まで、この大きい椅子に腰をかけてゐながら、やさしい、罪のない、正直な心で、自分の友達だといふヂツクとか林檎賣の婆さんとかの事を、夢中になつて話し立てた、あの氣輕で、美しい男の兒と、その年とつた伯爵とを鋭い心で比べその隔りの甚い事を感じてゐるのだつた。それと、やがてポケットの中に深く突き込んでゐる、あのロード・フォントルロイの小さな柔い手に、先き／＼握られる筈になつてゐる、非常な額の歳入とか、壯麗華美な住宅、莫大な産業……さういふものが、善くも悪くも、どうにでも出来る權力が、その今小さな手に握られたといふ事まで考へて來た時に、思はず獨語をして、「これは大變な變化が起る。大した變化に違ひない。」と言つたのであつた。

そのうちに、間もなくセドリツクが母といつしよに、その客間に戻つて來た。セ

ドリツクはそれは大した勢だつた。ハギツシャムさんと母との間の處にある自分の椅子に腰をかけて、膝の上に手を置き昂奮した様子をしてゐた。ブリジエットを助けて悦ばせた事が嬉しくつてたまらない、その心が顔いつばいに溢れるやうになつてゐた。そしてかういつた。

「ねえ、泣いてましたよ！ それはね、嬉しいので泣くのだつて、さう言つてゐましたよ。僕は嬉しいから泣くつていふ人を、初めて見ました。僕のお祖父さんは、随分いゝ人ですね。僕はそんなに、好い人だつて事は知らなかつたのです。それから伯爵になる事も、あのね……僕が考へたよりか、随分いゝのですね。僕は、伯爵になるのが……あのね、随分嬉しくなつて來たのです。」



③ それぐの贈物

次の週間のうちに、セドリックは伯爵になるといふ事の嬉しさを、いろ／＼と知る事が出来た。しかし、自分の欲いと思ふ事は、何でも大方して貰へるこいふ事は、まだ十分によく解らず、どうしてもそれを吞込む事は出来なかつたらしい。一體このセドリックの望む事の至つて單純なものと、それをして貰つて喜ぶ様子とを見ると、ハギッシュさんは何故か自分も嬉しくなるのだった。

このイギリスに向つて出發する前、一週間のうちには、いろ／＼な面白い事があった。或朝、ハギッシュさんはセドリックをつれて、町の盛り場の方にデックに逢ひに行つた、その時の事や、それからその午後には例の門閥の舊い林檎賣りの婆さんが、露店を出してゐる處に行つた。そこでその婆さんに、テントと火鉢と、肩掛けと、それからその婆にとつては、とんでもない多額だと思はれるお金とをやるといつて、ひどくびつくらさせた事などは、兩方とも、ハギッシュさんには不思議な事のやうに思はれたので、いつまでも忘れられない事になつて心に残つてゐた。林檎賣りの婆さんの處では、セドリックは如何にもかわい、様子で、さういふ事をするわけを婆さんに話して聞かせたのであつた。

「僕はね、今度イギリスに行つて伯爵の子供になるのだよ、お婆さん。だからね、雨が降つたたんびに、お婆さんの骨の事を考へるだらうと思ふの。僕の骨はちつとも痛かないんだから、僕はお婆さんがどんなに痛いかわからないけれども、僕はお

婆さんが氣の毒なんだもの。だから早くよくなるといふと願つてるのさ。」

と、かういつた。で、露店の婆さんはそれを聞いてゐたけれども、あんまり思ひがけない事なので、意外な幸が自分の處に來たのが、どうしても呑込めないで、少しぼんやりして居るうちに、セドリツク達は歸つていつてしまつた。

歸つて來る道で、セドリツクは、

「あの林檎屋のお婆さんは、それはいい人なんです。もう先にね、僕がころんで、膝つこを擦りむいたらね、たゞで林檎をくれたんですよ。あなただつて深切な人の事は忘れられないでせう。」

といつた。セドリツクの單純な正直な心では、世間には自分を深切にしてくれた人の上を忘れるものが、どんなに多いかといふ事を考へられなかつたのである。

それで、その日のチックとの應對の様子も、それは全く面白いものであつた。そこに行つた時に、チックは仲間のジュークといふのと、何事か争ひをしたあとで、

何だか面白くない顔をしてゐた。そこにセドリツクが來て、どつさりお金をあげるし、後でうるさい事のないやうにしてやらうと言ふのを聞くと、どうした事なのか解らないで、たゞびつくりしてしまつた。その場合に、この小さいフォントルロイが、今日逢ひに來たわけを話した様子は、如何にも淡泊で、無造作で、それを傍に立つて聞いてゐたハギツシヤムさんは、全く感心してしまつたのだつた。チックの方では、是れまで自分の友達だと思つてゐたこの小さな子が、身分の高い貴族であり、それから無事に大きくなつて行きさへすれば、自然に伯爵といはれる位になれるのだと話して聞かされたので、眼と口を開けたまゝでびつくりしたが、そのはずみに頭から帽子を落してしまつたのだつた。

その帽子をひろひながら、何だか聞き取りにくい事をいつた。ハギツシヤムさんには、その言つた事がよく聞き取れずに、妙な言葉だと思つただけだが、セドリツクには、それがちやんと通じたのである。

「なんでい！ おれをかつごうつてしやがつたつて、知つてらあ！」
 といったのだつた。この時には、若殿はこれ聞いたので、ちよつと困つた様子だつたが、しかし、勇敢な様子で心持を取り直して、かういふ風に説明をしたのだつた。

「それはね、初めの時には、誰だつて本當でないやうに思はれる事なんだよ。ね、ホップスのをぢさんだつて、僕が病氣ぢやないかつて思つたんだもの。初めはね、僕もいやだつたんだよ。けれども、今ではもう慣れてしまつて好きになつたよ。今の伯爵はね、僕のおぢいさんなんだよ。そして大變深切な人だよ。僕に好きなものを好きだけ買へつて、ことづけてくれたんだよ。だからね、ハギツシヤムさんにお金を預けて持つて来て貰つたんだから、ジェイクの株を買つたらいいと思つて、君に少し持つて来て上げたんだよ。ねえ。」

そこでつまりの事は、デックは仲間のジェイクの株を買つてしまつて、一人で客

を呼ぶやうにするし、新刷毛と、すぐ目につくやうな看板と、著物とを買つて貰つたのだつた。さうすると、デックもやつぱり、あの門閥の古い林檎賣の婆さんと同じに、どうしてもすぐには自分にそれ程のしあはせが向いた事が、呑み込めないのだつた。それでまるで夢でも見てゐる人のやうにぼんやりした顔つきで、その友達の若殿の顔をしげ／＼と見つめてゐた。そしてさういふしあはせが、烟のやうに消えていつてしまひはすまいかと思つてゐる様子だつた。

それでセドリツクが、いよ／＼別れようとして、握手する爲めに手を出した時

「では左様なら！ うまくおやりよ。僕は君に別れるのはいやだけれどもね、伯爵になつたら、又来るかも知れないからね。僕は君とは仲のいい友達だつたからね。手紙をくれたまへ。これは手紙を書く時の所書だよ。僕の名前はね、もうセドリツク・エロルでなくなつて、ロード・フォントルロイつていふんだよ。では左様なら！」

と、セドリックの方でも、何気なしに言はうとしたが、聲が震へたやうになつて、その大きな褐色の眼をひどく瞬きさせて居た。デックも同じやうに瞬きをして、睫の處が濕つたやうな様子だつた。

この靴磨をしてゐるデックは、何にもちやんとした躰を受けた事のなかつた者なので、自分の心で感した事を、よく言ひ表はすべを知らないのであつた。それで何を言はうともせず、たゞ頻りと瞬きをしながら、咽喉に塊がつかへたやうになつたのを、やつとの事で呑み込むやうにしたのだつた。そのあとで、かすれたやうな聲を出して、

「行つちまふんぢや、つまらねえな。」

といつたのだつた。それからハギツシヤムさんの方に挨拶をして、

「旦那、どうも有難うございました。逢はせにつれて来てくれて、ふんとに有難うございました。この子が、かわいくつてね。え……元氣が好くつてね……いゝ子

でさあ。

と、とざれ／＼にこんな事を言つたのだつた。さうして元氣のいゝセドリックの後姿が、背の高い、嚴めしいハギツシヤムさんに連れられて行くあとを、ぼんやりと立つて見送つてゐたのだつた。そして又その眼が曇つて来て、咽喉に塊がつかへたやうになつたのであつた。

それから、出立の其日になるまでの間、この若殿は隙さへあると、ホップス爺さんの店に出懸けて行つてゐた。この頃になつて、ホップス爺さんは何となく氣がふさいだ様子になつてしまつてゐた。セドリックがお別れの記念にといつて、金の時計と鎖とをもつて、勇んで飛び込んで来た時などには、ろくにはき／＼ともものも言へない位だつた。其時計の箱をその頑丈な膝の上に載せたまゝで、たゞ何度も怒つたやうな調子で鼻をかんでゐるのだつた。その時にセドリックはかういつた。

「ねえをおさん。こゝにある事が書いてありますよ。僕が箱の内側に書いてくれつ

て注文したのです。ねえほら「ホップス氏に呈す。一番古い友達のフロントルロイから」つてね。あるでせう。」

ホップス爺さんは又烈しい音をさせて鼻をかんだ。そしてやはり、チックと同じやうなすすれた聲でかういつた。

「こつちぢや忘れやしないがな。イギリスの貴族ん中に行つてから、そつちで忘れないやうにしておくれよ。」

「どんなところに行つたつて、僕はをぢさんを忘れはしませんよ。僕はをぢさんとこに來てた時が、一番面白かつたんだもの。いつかね、をぢさんの方で僕に逢ひに來て下さいな。僕のお祖父さんは、さうすればきつと喜びますよ。僕があつちに行つてからね、お祖父さんにをぢさんの事を話すと、お出でなさいつて手紙をよこすかも知れませんね。あのね、をぢさん……をぢさんは僕のお祖父さんが伯爵だつて、嫌ひぢやないでせう？ それでもしおいでなさいつて言つて來たら、伯爵だからい

やだつては言はないでせう？」

ホップス爺さんは、いかにも寛大な様子で、

「いゝよ。さうしたら逢ひに行くよ。」

といつた。先づこれで伯爵の殿様から、ドリンコートのお城に來るやうにといふ、鄭重な請待狀が來る事でもあつたとすれば、ホップス爺さんは、その頑固な共和主義の感情をすて、旅仕度をするといふ約束が成り立つたのであつた。

さうしてゐるうちに、たうとう旅の仕度もすつかり出來て、荷物を大陸行きの船に積み込む日が來た。そのうちに、愈々馬車がこの家の戸口の所に來て止つた。その時になつて、セドリックは何とも言はれない寂しい心持がしたのだつた。さつきから自分の部屋にとち籠つてゐたお母さんが、下に降りて來たのを見ると、お母さんの眼がふだんよりも大きくなつてゐて、濡れてゐた。そのかわい、唇のまはりには震へてゐるのだつた。それを見ると、セドリックは引き寄せられるやうに、傍に寄

つてお母さんがからだを屈めた處に抱きついた。そして兩方からキスをしあつた。何故といふ事なしに、この母子が兩方から、悲しいやうな氣持になつてしまつたのだつた。それをセドリツクはすぐ感じて、そのしほらしい心持を、口に出してかういつた。

「お母さん。二人ともがこの家が好きだつたのね。いつまでも好きになつて居ませう。ね。」

母の方も、やさしい小聲で、

「ほんとな、セデイ。」
といつた。

そのあとで馬車に乗り込んだが、さうしてからもセデイはわざと母の近くにからだを寄せて坐つて居た。母が馬車の窓から振り返つて、名残り惜しうに住み馴れた家の方を見てゐると、セデイは母の顔を覗き込むやうにして、その手を撫でたり

握つたりしてゐた。

そのうちに、間もなく、恐しい程の混雑してゐる中にまぎれ込んで、そのまゝ、船に乗つてしまつた。客を乗せた馬車は頻りと往つたり來たりしてゐる。客は荷物のおくれるのを氣をもんでゐる。大きな箱や、櫃を引ずり廻したり、投げ出したりしてゐる。小舟の船頭たちは、もやつてゐた繩を解いて、あつちこつちと漕ぎまはつてゐる。貴婦人、紳士、子供のもりなどといろく／＼な人が、だん／＼に乗り込んで來た。嬉しさうに笑つてゐる人もあるし、悲しさうに口を結んでゐる人もある。中で二三人の人は、泣いた眼をハンケチで拭いてゐた。

セドリツクは、その中で何を見ても面白くないものはなかつた。積み上げてある繩だとか、捲いてある帆だとか、眞青な、太陽の燃えてゐる空を突き破るかと思はれる程、眞直な高い帆柱などを見てゐながら、水夫たちに話をしかけて、海賊の話聞き出さうと、もう心の中で思つてゐるのだつた。

やがて、船が出帆する間際といふ時になつた。セドリツクはデッキの欄干によりかゝつて、水夫や阜頭人足達が、出帆間際の最後の仕度をするので大騒ぎをやつて働いてゐるのを面白がつて見てゐた。その時に、ふいと氣がつくと、自分のすぐわきの人込みの中が、何だか少しごたくしたやうで、誰だかが、その人込みを押しわけて自分の方にやつて來た。見ると、手に赤いものを持つた男の子で、よく見ると、それは確かにデックで、息を切つてセドリツクの方に近寄つて來るのであつた。「よお。馳つ通しに馳けて來たんだぜ。おめへに逢はうとつてよ。素敵もねえ繁昌だぜ。昨日儲けたんでこれを買つて來たんだ。なあおめへ、それえ人んところに行つたら持つて歩きねへ。下で上げねえつていふんで、おれが騒いでるうちに、包みの紙がとれちまつたんだ。ほれハンケチだぜ。」

と、一息にいつたが、セドリツクが何とも返事をする隙のないうちに、出帆合圖の鐘が鳴る。それを聞くと、又一つとびに馳け出して行つてしまつた。その時に又息

を切らせ切らせ、

「それえ人んところに、いつたら、持つて歩きねえよ。」

といつた。そしてその聲だけが残つて、その姿は人込みの中に見えなくなつてしまつた。と、間もなく、込みあつてゐる中をくぐりぬけて、下甲板に降り、阜頭に足をかけた、その拍子に棧橋は船の上に引き上げられてしまつた。

それでデックは阜頭の處に立つてゐながら、頻りと帽子を振つてゐた。船の上ではセドリツクが、今貰つたハンケチを手につつたまゝで、その方を見てゐた。よく見ると、そのハンケチは眞赤な絹なので、それに紫で馬蹄と馬の頭とが飾りについてゐた。

その中に、今迄よりも混雑が一層烈しくなつて、ものゝ輾る音や、引張る音が凄じい響を立て始めた。阜頭にゐる人は、船の上の人を目がけ、船からは送つて來た友達に向つて、別れの挨拶をする聲が、一緒になつて、誰が言ふともわからず、湧

き上るやうであつた。

「さやうなら！ 皆さん。……さやうなら！ 忘れてはいやですよ！ ……リヴ

ールに若いなら手紙をね！ ……さやうなら！ さやうなら！」

とてんでにいふ聲である。

フォントルロイは欄干によりかゝつてゐたからだを、ずつと前に乗り出して、大元氣で、

「ヂック、さやうなら、ありがたう。ヂック、さやうなら！」

と、呼び立ててゐた。

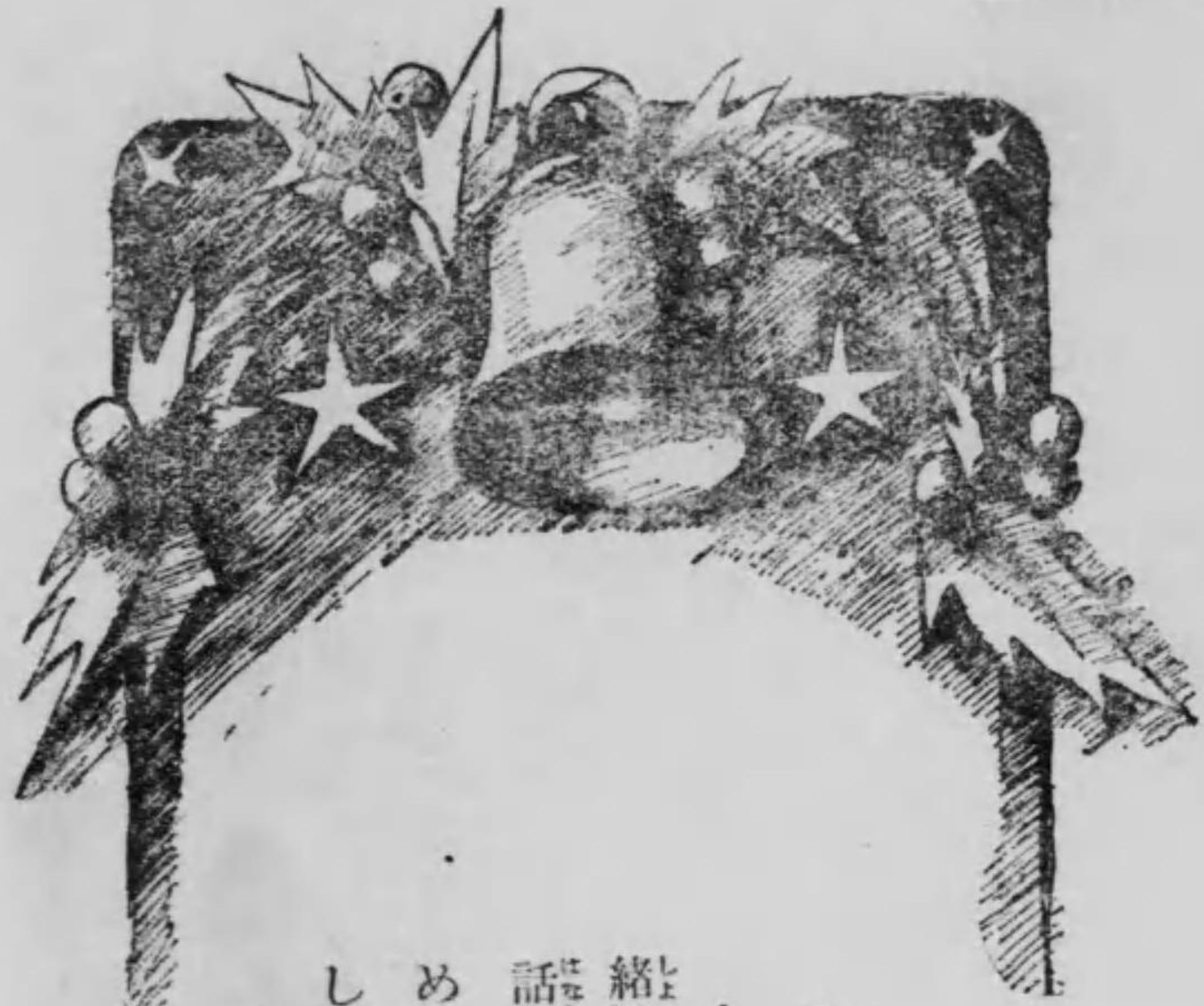
この時に、大きな船は、静かに動き出した。人々は今更のやうに又聲限りと呼び立てる。セドリックの母はその時にわざとエールを眼の上まで引き下げた。阜頭の方では大變な混雜だつたが、ヂックはフォントルロイのかわい顔と、風に吹きなびいて、さら〜光つてゐる髪の毛とを見つめてゐるので、まはりの混雜には一切

氣がつかかなかつた。フォントルロイは、幼い聲の精いつばいで、

「ヂック、さやうなら！」

と叫んでゐた。

そのうちに、船が除々に進んで行く。それに載せられてフォントルロイは、その生ひ立ちの故郷を離れて、まだ知らない先祖の國に向つての、旅が始まつたのだつた。



四 イギリスで

この船旅のなかで、セドリックのお母さんは、初めて、イギリスに著くと、自分が、セドリックの住む家と一緒にには居られないことになるのだと云ふ話しをして聞かせた。やつとそれが呑み込めた時に、セドリックは非常に驚いて悲しがつた。傍で見てゐたハギツシヤムさんは、伯爵が、せめてもこの母をすぐ近くに往ませて、時々逢へるやうにしたのが、全くい、思ひつきであつた。

たと考へた程であつた。さうでもしなかつたらば、とてもこの子を母から引き離すのはむづかしいことだつたらうと思はれたのであつた。そんなに悲しがつて居たか、お母さんがやさしく心をこめて、この幼い子に言ひ聞かせたので、そしてその別れてゐるといふ家が、ほんの近くにあるといふ事を、よく呑み込ませるやうにしたのであつた。それがやつと呑み込めたので、それで少しは諦めがついた様子であつた。

「ねえセディ、お母さんの居る家はね、お城からそんなに離れてはゐないのよ。ほんとにね、あなたが毎日馳けて逢ひに來られる位、少ししか離れてゐるのではないのよ。だからね、あなたは毎日來て、いろ／＼な話が出来てせう。そしてその事がどんなに嬉しいでせうね。お城の中はね、それは綺麗なんですつてさ。お父さんがよくお話しになりましたわ。お父さんはそのお城が大變お好きだつたつけ、あなたもきつと好きになりますよ。」

と、その話が始まると、その度にお母さんはかう言つてなだめるのだつた。

セドリックは、この話を聞いてひどくがっかりした様子で、

「でもね、お母さんと一緒だと、もつと好きになりますよ。」

と、いふのだつた。

子供の心持にも、セドリックはこの「お母さん」と自分とが別々に住むといふ事が、不思議な取扱ひなので、どういふ譯だらうと、思ひ迷はずには居られないのだつた。

しかし、エロル夫人の考へでは、どういふ譯で、別の家に住むやうにしたかといふ事は、セドリックには知らせない方が好いだらうと思つたので、ハギッシャムさんにその話をしたのであつた。

「私はどう考へても、話さない方がよろしいやうに思ひます。話しましても、本當にはわからないと思ひますし、それに聞きましたらば、驚きましていやな心持を起

すだけの事でございませう。それにお祖父様が私をそれ程ひどく嫌つておいでになるといふ事を、存じませんで居りさへすれば、素直にお憤り申すでございませうよ。セデイは、今日までに、人が憎むとか、人情にはづれた事をするとかいふやうなことを、全く見た事がございせんので、もし誰か、私を憎んでゐるとても申しましたら、どんなにひどく驚く事でございませう。あんなにかわいがられてばかり育つてまゐりました子でございします上に、私を思つてくれますのが、一通りでなく深いのでございますから。それでございますから、もつとずつと大きくなりますまでは、その事は聞かせません方が、伯爵のお爲めにもよろしからうと存じます。さう致しませんと、セデイはあんな赤坊ではございますけれども、どうしてもお祖父様との仲に隔てが出来は致しませんまいか。」

さういふ譯でセドリックは、今は自分がもつと大きくなるまでは、わからない不思議な事があつて、さういふ風になつてゐるのだと思つてしまつた。それは大きく

なりさへすれば話して貰へる事に違ひないと思つてゐたのだつた。さう思つても、不思議に思へる事はどこまでも不思議であつた。たゞなぜお母さんと別れるかといふ事に就いて、どこまでもその譯を考へつめる事は出来なかつた。それにお母さんが、幾度も繰返して町寧に慰めるやうに話してくれるのだし、全體の事について、楽しい方の事についての想像をするやうな話をしてくれるので、さういふ心配な事は、だん／＼と心から消えて行つたのであつた。

けれども、時々、海を見ながら、ひどく思ひ込んだ顔つきをして考へてゐる處をハギツシヤムさんが見る事があつた。そしてさういふ時には、子供には不似合な吐息が聞えるのであつた。ある時、いつもの尤もらしい様子で、ハギツシヤムさんと話してゐるうちにかういつた事があつた。

「僕はどうしてもいやで仕方がないのです。どんな位いやだか、あなたに知れない程いやなのです。でもね、世の中には苦しい事がいろ／＼あるんですつてね。それ

を誰でも辛捧しなければならないうつて、メリーもよくさう言つたのです。それから僕はホップスをおさんからも、いつかさうさ／＼しましたよ。それからね、お母さんは、お祖父さんは子供がみんな死んでしまつたから、それを大變悲しがつていらつしやるんですつてね。だからお祖父さんと一緒にゐる事を好にならなければいけないつて、さうお言ひでした。誰でも子供がみんな居なくなつてしまへば、それは氣の毒ですわね。それに一人の人は、急に死んだのですつてね。」

この若殿と知りあひになつた人達が、いつでも嬉しい氣持になるのは、何でも話に身がいつて來ると、調子づいて熱心になる事と、ませた物の言ひ方をする處とであつた。特別に、まる／＼とした幼顔の、實にあどけない様子と、それに何か仔細らしい表情をする處に、誰でも言ふに言はれないかわい／＼心持を起すのであつた。全く珍らしく美しいこの小さなセドリツクが、ちよいと腰をかけて、小さな柔かい手で膝を抱へながら、何かわけのありさうに話をするのを、面白がつて聞かない人

はなかつたのである。ハギッシャムさんさへ、セドリツクと一緒にからうして旅をするのを、いつの間にか心のうちで非常に楽しく思ふやうになつてゐた。

ある時、ハギッシャムさんが、

「では、あなたはお祖父さまを好にならうと、思つておいでですか。」

と聞いた事があつた。するとセドリツクは、

「え、それだつてお祖父さんは僕の親類ではありませんか。誰でも親類を嫌ひな人は無いでせう？ その上にお祖父さんは僕をあんなに深切にして下さつたのですもの。いろんな事をしてくれて、それから何でも好きな事をしてやるつていふ人なら、親類でなくつても、それは好きになりますとも。それなのに、親類の人で、それにそんなにしてくれるんですもの、尚ほ好きになる筈ではありませんか。」

といつた、それを聞いて、ハギッシャムさんはその上、かう聞いて見た。

「どうでせうね、お祖父さまの方では、あなたが好きなのでせうかね？」

すると、セドリツクは何の疑ひもなしに、

「え、好きだと思ひますよ。僕はお祖父さんの親類なのですもの。僕はお祖父さんの子供の子供ですもの。好きに極つてゐる筈ですよ。それから僕を好きでなければ、僕のほしいものを何でもやるつて言ひはしませんよ。それにあなたを迎へによこしたり爲る筈がないではありませんか。」

「成程、さういふ譯ですか？」

「さうですとも、あなたもさう思ひませんか？ 孫が嫌ひだつていふお祖父さんが

ある筈はないではありませんか。」

で、船旅の日が重つて、船酔の爲めにケビンを出なかつた人達が、おひ／＼とデッキの上に出て来るやうになり、デッキの椅子によりかゝつてゐながら、大方の人が、船中の無聊を感じてゐるやうになつた。その時に、誰が言ひ出すといふ事もなしに、フロントルロイの如何にも物語のやうな運命が、船ちゆうの評判になつてゐ

た。それで毎日、船の中を馳けまはつたり、母や、或はその背の高い年とつた紳士と散歩をしてゐたり、水夫をつかまへて何か話をしたりしてゐる、その小さい子に氣をつけて見ない人はない程になつた。

處で、セドリツクは誰にても仲がよくなつた。どこにいつても親しい人が出来るのだつた。デッキを散歩してゐる紳士が、セドリツクを呼びかけて、一緒に散歩をしないかといつた時などは、きりつとして様子で、勇しく大股に歩いて、それについていつた。そして戯言を言ひかけられると、やはりその調子に應じて、面白く返事をするのだつた。それから又、婦人達が話をしてゐる中に、セドリツクが交つてゐると、セドリツクを取圍んでゐる中から、きつと入つた大笑ひが聞えて來るのだつた。それから、もしこの船に乗り合せた子供たちと、セドリツクが遊んでゐる時には、きつと何か極く珍しい遊びが始まるのだつた。

それから水夫の間にも、特別に心易くなつたのがあつて、その人から海賊の事や、

難船の事や、無人島に漂流した話とか、面白くつてたまらない話を聞いたのであつた。セドリツクはてうど、自分の持つてゐたおもちゃの船があつたので、それをもつて帆をあげる事とか、繩のつなぎ方とかを覺えたのだつた。セドリツクは、その水夫達の使ふ他の人の中では聞きつけない言葉を、驚く程早く覚え込んでしまつた。そして誰とかと話をする時に、わだかまりの無いいつもの調子で、さういふ言葉を使つては、そこにゐる紳士や婦人達を笑はす事が度々あるのだつた。

さういふいろ／＼な人の中でも、一番よく話をしてくれるのは、デニリーといふ年とつた水夫だつた。この爺さんの話を聞いて見ると、何でも二三千遍も航海をしたらうと思はれる程である。そして、そのたんびに恐しい人喰ひ人が住んでゐる島に漂流をしたといふ事である。そしてその爺さんの話によると、デニリーはからだを切られて、それを焼いて喰はれた事も何度あるか知れない。頭の皮をむかれてしまつた事も、十五へんや、二十へんはあつたやうだ。

セドリックは、その話をしてお母さんにかういつた。

「だから、あの人の頭は禿げてるんですよ。何べんも頭の皮をむかれたら、もうあとに毛は生えやしませんものね。一番しまひの時にね、バロマチャウイーキン人の王様が、ウオップスレーマンブキー人の酋長の頭の骨でこさへた庖丁で、やられたんですつて。その時から毛が生えなくなりましたとさ。その時程、危い目に逢つた事はなかつたのですつて。その王様に庖丁を振りまはされた時には、びつくりして恐かつたのでね、頭の毛がまつすぐに立つてしまつて、もとのやうに寝なかつたのですつて。ヂェリーの頭の皮をむいたのをね、その王様が今でもそのまんまでかぶつてるのでね、まるでブラシのやうですとさ。お母さん僕はヂェリーのやうなめにあつた事のある人を、見た事がありませんよ。だからね、この事をすつかりホップスをぢさんに話したくつて仕方がないですよ。」

折ふし、天氣模様が悪く甲板に出られないで、乗合ひの人達が、下の部屋に閉ぢ

込められたやうになつてゐる時には、セドリックをすゝめてヂェリーの經驗話をさせるのであつた。さういふ時には、セドリックは得意な様子で、夢中になつて話をするのだつた。それを、そこに集つた人達が、誰も彼も面白さうに聞いてゐる、その様子で見ると、これまで大西洋を渡つた人の中で、この子程、人から珍しがられ、大切にされたものはあるまいと思はれる程だつた。みんなの人が楽しむに、自分も出来るだけの事をして仲間入りをしようといふ風である。その幼いあどけない様子ではあるが、自分は閉つこに縮まつてゐるやうなものではないと、我知らず思ひ込んでゐる心組みが、わきから見ると一層かわゆく思はれるのであつた。

で、みんなの人に向つてヂェリーの話をしたあとで、母に向つてかういつた。

「お母さん。ねえ、みんなの人がヂェリーの話面白さうにして聞いてゐましたよ。けれどもねお母さん、僕はね……そんな事をいふのは、ひよつとしたら悪い事かも知れないんですけれどもね……あの話ね、あれはみんな本當でないのかも知れ

ないと思ふ事があるのですよ。みんなチェリーがした事ではないのかも知れないと思へるのです。それでも、みんな自分の事だつたと云ふのですよ。變ですわねお母さん。ねえ、ひよつとすると忘れて間違へるのかも知れませんがね。何度も頭の皮をむかれたのだからねえ。何度も頭の皮をむかれると忘れっぽくなるのかも知れないんですわ。

それで、セドリックがみんなの人達と、リゾーブルに著いたのは、デックに別れてから十一日目の事だつた。その次の夜に、ステーションからお母さんと、ハギッシャムさんと二人、一緒に馬車で、これからずつとセドリックの母の家になるコート・ロッヂといふ處の家の門に著いた。

その時はもう暗かつたので、家の外模様はよくわからなかつた。門をはひる時にセドリックの目についたのは、兩側から覆ひかかつてアトチのやうになつてゐる、大きな木の下を、車の道がずつとついてゐる事であつた。この道に乗り込んで行く

と、間もなく入口の戸が開いてゐて、燈火があか／＼と外までさしてゐるのが、すぐ目にはひつた。

で、メリーはセドリックの母の付添ひになつて、イギリスまで一緒に来る事になつてゐたのだが、此時にはもう先きに、この家に著いてゐたのだつた。それで、セドリックが車から飛び降りた時には、一人二人の召使が廣いよく掃除をした光つた廊下の處に立つて、メリーは戸口の處にゐた。フロントロイの若殿は、いきなり、その年よりの下女に飛びついて、嬉しさうにものを言ひかけた。

「や、メリー、お前もここに來てゐたの？ お母さんメリーが來てゐますよ。」といつて、メリーのあんまり柔かでない赭ら顔に、キッスをした。

「メリー、私はお前がここに居ておくれるので、本當に嬉しいよ。お前の顔を見ただけで、すつかり心持ちが落著いたやうな氣がしたの。この場所に馴れないで變なのね、お前が居ておくれるので、どんなに氣が強いかわれないわ。」

かう、エロル夫人も低い聲でいつた。その言葉と一緒に差し出された、小さな優しい手を、メリーは氣を上げますやうにしつかり握りしめた。そして心のうちでは、この夫人が人の母になつて、自分の故郷を遠く離れて来た上に、その一人の子供を、まだ逢つた事もない人の手に渡してしまはなければならぬ、それがどれ程つらい事だらうと、しみじみ氣の毒に思つたのだつた。

家附きのイギリス人の下女下男たちは、みんな物珍しさうにして、しげ／＼とこの母と子とを見てゐた。この者達は、二人の事について、もういち早くいろ／＼な噂を聞いて知つてゐた。老伯爵がこの夫人との結婚に對して怒つてゐる事、エロル夫人をこゝに別居させるそのわけ、この若殿が先き／＼になると莫大な資産を受けつぐ人である事、その老伯爵は淋風症と、それからひどい癩癩とで、まるで狂氣じみた程の氣質の人だといふ事、さういふ事を、すつかり知つてゐたので、この者達は一通りでなく、この母と子に對して好奇心を起してゐたのだつた。

「かわゆさうに、なか／＼樂ちやああるまいぜ。」

と、互ひに、ひそ／＼話しあつてゐた。けれども、その下女下男達は、今度著いた若殿の事は全く知つてゐなかつた。勿論未來のドリンコート伯にならうといふ、この小さい男の性質については、ちつとも知つてはゐなかつた。

セドリックはふだんから、人手をかりないやうにしつけられてゐた通りに、惜れた様子でわけなしにその外套を脱いでしまつた。そのあとでそこらを見廻して見ると鹿の角だとか、その他にいろ／＼珍しいものが、廣い廊下に飾りつけてあつた。セドリックは、これまでに住んでゐた家には、これ程の飾りつけのしてあるのを見た事がなかつたので、随分思ひがけない心持がしたのだつた。

「ここは随分綺麗な家ですね、お母さん。お母さんはこれからいつでもここに居るんだから、随分いいんですね。さうして大きな家ぢやありませんか。」
と、いつた。成程、こゝはニュー・ヨークのあの場末町にあつた、これまでの家に

比べて見ると、それはずつと綺麗で、心持のよい住居であつた。

メリーにつれられて、二階に上つて見ると、眼が覚めるやうな、紗のカーテンのかゝつた寝間には、ストロップに火がたいてあつた。そこには、雪のやうに眞白な、大きなベルシャ猫が、眞白な毛皮の敷物の上で、樂々と寝てゐた。メリーは、その猫を指して、

「あの奥様、この猫は、お城の奥の取締が、よこしたのでございますよ。何といふ深切な人でございませう。それに奥様がいらつしやるからつて、何から何まですつかり仕度を致しましたさうですよ。私もね、一寸お目にかゝりましたがね、亡くなつた旦那様を、前に大層大切にして居りましたさうしてね、ひどく惜がつて居りました。それでね、猫でも居ましたら、少しは御自分の家らしいお氣がなさうからつて、これをよこしてくれました。それにね、キャブテンは、またおちひさい時分から知つてゐたと言つてゐましたつけ。推出しのいゝ、かわいいお子でしたつ

てね。大きくおなりになつてからも、上方にでも眼下の者にでも優しくなさる、それは立派な方だつたと申して居りました。それでね、私の方でもかういひましたよ。今度おいでになるおぼつちやまも、もうとんとその方の通りですつてね。私はあんな立派なお子を他には知らないつてね。」

それで、セドリツクとお母さんとは、この部屋ですつかりちやんと身繕ひをして、それから下に降りて、今度は大きい立派な部屋に通つた。この部屋は殊更、天井が少し低くしてあつて、部屋の中にある道具はすべてどつしりしたもので、見事に彫刻がしてあるのだつた。椅子なども坐り込みの深い、凭り掛りが高い、それはがつしりしたものだつた。飾棚などが實に古雅で、その上にも見事な、珍らしい置物が並べてあつた。ストロップの前には、大きい虎の皮が敷いてあり、その兩側にアーム・チェアが据えてあつた。

二階の部屋にゐたあの嚴めしい様子の白猫が、いつの間にかもう、フォントルロ

イの若殿に懐き始めて、みんなのあとについて降りて来てゐたが、セドリックが敷皮の上に寝轉ぶと、その傍にからだをすり寄せて、

「これから、仲よしになりませう。」

と言ひでもする様子をして見せたのだつた。セドリックの方でも嬉しくなつて、自分の頭を猫の顔の處に寄せて、手で觸りながら、からだを横にしてゐた。その方に氣をとられてゐて、母とハギッシェムさんが、何かひそ／＼話してゐる事は耳にはひらずにゐた。

エロル夫人は、何か不安な心持がする様子で、顔色が悪かつた。

「今夜すぐにあちらにやりませんが、よろしうございませうね。今晚だけはせめて、一緒に居りましてもよろしいでございませうね。あなたはどう思召します？」と、低い聲で聞いた。ハギッシェムさんも同じやうな低い聲の調子になつて、

「さうですな、まあ今晚はいらつしやらずとも、よからうと思ひます。食事でもす

ましたら、私が先にお伺ひして、おつきになりました事を、伯爵にお知らせ致す事に致しませう。」

と、いつた。で、エロル夫人はセドリックの方を振り返つて見た。黄と黒との毛皮の上に、何の氣なしの、しなやかな様子をして、セドリックは寝そべつてゐる。ぱつと上氣した美しい幼い顔にふりかゝり、そして毛皮の上にも、ふさ／＼と亂れつかゝつてゐるその髪の毛に、ストーブの火が照り返してゐた。その大きな猫が、セドリックの小さい手でさすられるのが嬉しい様子で、いかにも樂々として、目を眠りかけながら、ごろ／＼喉を鳴してゐた。エロル夫人は、この様子を見て、我知らず寂しい笑ひを浮べたが、それが顔に出るか出ない位に、急に又凋れ切つた顔つきに變つてしまつた。そして、

「伯爵は、私がこの子を離しますについての苦しい心持を、半分も御存知ではあるまいと存じますよ。」

と、吐息をするやうにいつた。それから、ちよつと改つた様子でハギツシヤムさんに向つて、かういつた。

「どうぞ、あのお金の事につきましましては、私が御辭退申しましたと、あなたからお傳へ下さいませんか？」

「お金の事！ そのお金とおつしやいますのは、伯爵が奥さまの歳入をお定めにならうといふ、その事ではありますまいな？」

と、ハギツシヤムさんは、不審さうに聞かれたが、エロル夫人は卒直な調子で、

「ええ、その事を申すのでございませぬ……私は、このお家を頂戴したのも、全く子供の近くに居りますのに、都合がよろしいと思ひますので、餘儀なくお受け致しましたのでございませぬ。その他のいろ／＼な事は、質素にさへ心掛けてまゐりませば、不自由を致しませんだけの事は、用意して居りますから、お金の方の事は、御辭退致したいと思ふのでございます。伯爵がそれ程まで、私を憎く思召しておい

での處でございませぬのに、お金を頂くと致しますと、何だかセドリツクとお金とを引換へに致しましたやうで、心持がよくないのでございませぬ。今、セドリツクをあららに差上げますのは、あの子の爲めを思ひますのと、私が母の情で、自分の心持などは二の次に致さなければならぬと思ひますから、それと、かういふ風になりませぬ事は、亡くなつた人の望みであらうと思ひますからでございませぬ。」

と、いつた。

「それは案外なお話です。そのお考へを伯爵にお傳へしましたらば、伯爵は却つて奥様のお心持を了解なさらずに、御立腹になる事だらうと存じます。」

と、ハギツシヤムさんがいつた。

「それは、あららで少しお考へ下されば、きつとおわかりになる事だらうと思ひませぬが、私はそのお金を頂かなければ困るといふ譯ではございませぬから、私を憎い者だと思ひになつて、御自身の孫になるセドリツクを、その母の手から取つてし

まはうとなさる方のお手から、お手當を頂いて、それで贅澤なくらしを致す心持に
 はどうしてもなれないのでございます。」

それを聞いて、ハギッシャムさんは暫く黙つて考へてゐたが、やがて、

「では、そのお言葉の通りを申し上げませう。」

と、いつた。

それこれして居るうちに、食事が運ばれて来て、みんなで食卓についた。その大
 きな猫もセドリツクの傍の椅子に、ちやんと載つて、食事の間ちやう、さも殿めしく
 ゐばつてゐる様に、喉をごろ／＼鳴してゐた。

で、それから間もなく、ハギッシャムさんはお城にいつたが、すぐ逢はうといつて
 部屋に通された。伯爵はその時にストープの傍の、贅澤を盡した椅子に腰をおろし
 て、いつもの酒風症で惱んでゐる足を、足臺の上に載せて休めてゐた。が、太い眉
 の下から鋭い目をして、そこにはひつて来たハギッシャムさんの顔を、きつと睨むや

うに見た。その上へは落ちつき拂つてゐる様子であつたが、心の中では、人知れず
 苛だつて、胸を沸き立たせてゐるのだといふ事を、ハギッシャムさんはすぐ覺つた。

「や、ハギッシャム、歸つて来たね、どんな風だつた？」
 と伯爵がいつた。

「左様でございます。フロントルロイ様は、母君と御一緒にコート・ロッチにおい
 ででございます。お二人とも、海上でも非常におたつしやで、御機嫌よくお著きに
 なりました。」

伯爵は、これを聞いたが、心に何か待ち遠しく、氣が急ぐ様子で、手をもち／＼
 させながら、鼻先で、

「ふん！」といつた。

「結構だ。その方はそれでよしとして、ハギッシャム、まあ掛けなさい。一杯のんで、
 それから落ち付いた上で、跡の話を聞かう。」

といつた。

「それで、フォントルロイ様は、母君のあのお宅に、今夜御一泊なさる事にしまして、田朝、こちらにおつれ申す手筈に致しました。」

と、ハギッシャムさんがいつた。伯爵は椅子の臂掛に臂を置いてゐたが、その手を目に翳して、ハギッシャムさんを見た。

「ふん、でどんなだ？ この事に就いては、細かい知らせをしないでよいといつて置いたので、私はまだ何にも知らずに居るのだが、一體どんな子供だ、その小さいのは？」

母の方の事は聞かなくつてもいい。子供はどんなだ？

ハギッシャムさんは、伯爵がついてくれたポート・ワインを一口飲んで、そのコップをまだ手に持つたまゝでゐたが、控えめにかういつた。

「そのお尋ねではございますが、何といつても、まだ七歳におなりになつたばかりのお子さんですから、御性質などといふ事に就きましては、これ／＼とお話し致しにくい事でございます。」

といかにも圓滑な様子でいつた。それを聞くと、伯爵は疑ひや掛念が強くなつて来た。で、すぐその目を光らせてハギッシャムさんを見ながら、亂暴な調子でかういつた。

「馬鹿か？ 犬の子見たいなやぐざものか？ 母がアメリカの下司女だといふ處が、そつくり出てゐるのか？」

「いえ、母君がアメリカの御婦人でおいでになるといふ點での、悪い結果はちつともお見受け致しませんでした。私は子供に就きましては、全く親しみの少ない方でございますが、どちらかと申しますと、私の見ました處では、先づ立派なお子と思はれます。」

と、ふだんの冷然と落付いた調子で言つた。ハギッシャムさんのものの言ひ方は、一體にふだんから調子づいてしまふ事の無い、落付いた調子であるが、この時には特

に平生よりも、控え目にもものを言つたのであつた。さうしたのは、伯爵が前以つていろ／＼のことを、あまり知らないやうにして置いて、そこにふいと、あの孫に逢ひ、自身で判断をした方が、双方の爲めにいゝだらうと、賢くも考へたのであつた。

「丈夫で、よく育つてゐる子供か？」

と、伯爵が聞いた。

「左様でございます。非常に御丈夫で、立派な發育をしておいで、でございます。」

伯爵は、ひどく急ぎ込んで来て、

「手や足などが、すらつとして居るか？ 見た處は見よい方か？」

と、聞いた。その時にハギッシヤムさんの、薄い唇のまはりに、はつきりとわからぬい程の、微笑が表はれた。その今の前までコート・ロツヂで見てゐた、それが目のうちから消えずにゐるセドリツクの姿……如何にも楽しさうに虎の敷皮の上に他愛なく横になつてゐた、あの美しい畫のやうな、美しく輝く毛がその毛皮の上に、ふ

つさりと亂れて、ぱつと上氣した幼い顔などの、さういふ有様を思ひ浮べながら、「一應、立派なお人柄だと存じました。しかしそこらは私の判断は充分たしかでございませんかも知れません。けれどあなたが、これまで御覧になりましたイギリス生れの子供とは、少し趣きの變つた處がございませうか。」

といつた。伯爵は、この時に急に起つた足の痛みの苦しさを、荒れ立つたやうな様子になつて、

「さうだらう。アメリカの子供といふのは、禮儀も知らない乞食見たいな奴だといふ事だからな。」

といつた。

「しかし、あの若殿は無作法な御様子は少しもございませぬ。只今、本國の子供と違ふと申しましたのは、はつきり断定は出来ないのですが、同じ年頃の子供よりも、大人の中に交つておいで、した故でせうが、子供らしい處と、大人びた

ところが交つてゐる御様子だと申し上げるつもりでございました。」

「そこがアメリカ風の出すぎ者のする事なのだ。そこらは兼てから聞いて知つてゐる。あいつらは、それを早熟だとか快活だとか言つてゐるのだ。何れ氣持の悪い無作法な奴に違ひない。」

ハギツシヤムさんは、又少しばかりポート・ワインを飲んだ。この人は伯爵に向つてよだんから決して議論をしかけた事はなかつた。特別に、その足の持病が起つてゐて、焔衝してゐる場合には、そつとして觸りないやうにあしらふ事が、何よりいい事を知つてゐた。それで、この時には、兩方とも暫く黙つてしまつたのだつた。

そのうちに、ハギツシヤムさんは、

「エロル夫人からのおことづけがございます。」

と、いつた。すると伯爵は又、獅子の吼えるやうな罵り聲を出して、

「ことづけだ？ あの子からのなら聞き度くもない。あの女の事は、なるべく耳に

入れないやうにしてくれ。」

と、いつた。

「しかし、これは少し大切なおことづけでございます。夫人はこちらからお送りにならうといふ年給をお断りしたいと申されたので……」

伯爵はひどく驚いた様子で、大きな聲を出して、

「なんだ？ それは何を言ふのだ？」

とどなつた。ハギツシヤムさんは、も一度前に言つた通りの事を話した。

「夫人は、御年給を受けられる必要が全く無いと言はれます。特別に伯爵との御親しみも疎い事ですししますから……」

すると、伯爵は火のやうになつて怒つた。そして言葉を叩きつけるやうに、

「親しみが無いといふのか！ ふん、親しみどころか、あの女の事は考へても心持が悪い！ 貪慾な、高慢なアメリカ女め！ 何を言つても受け付けないぞ！」

といつた。

「失禮な申し方ではございますが、夫人を貪慾とおつしやるのは、私には臍に落ちない事でございます。強ひてお望みになつた事は一つもありません。たゞ御年給をお受け致すまいとおつしやるだけでございます。」

「それはみんな策略だ。」

と、伯爵は斥ねつけるやうな調子でいつた。

「さうして置いて私の氣を引いて、面會でもさせるやうにしようといふ考だらう。今のやうな事を言ふのも、つまりはその精神に感服させて置いて、何か一仕事する氣で居るのだらう。感服なんかはしないぞ！　そこがアメリカ風の出すぎもののする仕方だ！　この城の近くに居て、乞食のやうな生活をしてほしくない。フォントルロイの母といふ事であつて見ると、相當な格式の生活をさせぬわけにはいかない。何といつても金は受取らせるやうにしなければいかん。」

「その年給をお送りになりましても、先方でお用ひになるまいかと思ひますが。」と、ハギッシャムさんがいふと、伯爵は又かつと顔に血を上らせた。

「使はらうと使ふまいと、そんな事には構はない。何といつてもやるものはやるといふ事にす。此方から何にもやらないので、乞食のやうな生活をすると言觸されるやうな事があつては迷惑をする。は、あ、それは子供に私を悪い人間だと思はせようとする考へだな。さういふ事をするまへに、もう充分悪口が吹き込んであるのだらう。」

といつた。

「いゝえ。さういふ事は少しもありません。夫人からは、別のお傳言がございませす。それをお聞きとりなさいましたら、全くさういふ事のないのが、おわかりになると存じます。」

と、ハギッシャムさんが言ふと、伯爵は、憤り立つた心と、苛々してゐるのと、病氣

の痛みとで、苦しむような息をしながら、

「そんな事は聞かなくともよい！」

と、どなり立てた。それにも構はずに、ハギツシヤムさんは、落ちついてエロル夫人のこつづけを話し出した。

「夫人が申されますのは、伯爵が夫人をお嫌ひになつて、フォントルロイ様と別れるやうになされた事は、出来る限りフォントルロイ様にお知らせにならないやうに、御注意なされ度いといふ事でございます。さういふわけは、フォントルロイ様がひどく母君をお慕ひになつておいででございますので、その爲めに萬一、伯爵におなづきなさらない事があつてはならないと、それを懸念しておいになるからでございます。到底、その意味が眞實に存込まれる事が出来ないのでございますから、それならば多少でも、フォントルロイ様が此方に對して氣をお置きになるやうな事がありまして、寵愛が薄らぐやうな事になりましては、残念だと思つて居られるの

でございます。フォントルロイ様に對しては、口今の處では、まだお年がゆかない爲めに、おわかりにならない事ですから、いづれ年をおとりになればすつかりおわかりになる事だとお話しになつてあるさうでございます。初めの御對面の時から、少しも隔てなしのお心でお出でになれるやうにといふ事が、夫人が痛切に御心配して居られる點でございます。」

伯爵は、仰向になつて、椅子の背に凭れてゐたが、その太い眉毛の下から、窪んだ老人の眼が、猛々しい光で、人を射るやうに見てゐた。そしてその忙しい息づかひがまだ治つてゐないで、

「何だ！ その事に就いては、母から何にも聞かせてないといふのか？ そんな事はないだらう。」

と、いつた。ハギツシヤムさんは冷然として、

「その事は一こともお聞かせしてありません。これは確かな事でございます。フォ

ントルロイ様は、此上もなく慈愛の深いお祖父様だと、信じ切つておいで、ご
 ます。完全な愛情の深い御性質であると信じておいでになる上に就いて、疑ひをお
 起しになるやうな事を、お聞かせした者は、決してないと申し上げられます。ニ
 ヲヨークでは、兼てお指圖になりましたやうに、致しましたので、此方を實に寛大
 な慈善のお心の深い方だと、思つてお出ででございます。
 と、いつた。

「本當にさうなのか？ え、」

「全く、この事はどこまでも私が保證致します。それでこれから御對面になる上に
 就いてでございますが、出すぎた事とお思ひかも知れませんが、母君の事に就いて
 は、決して悪くおつしやらない方が、何よりよろしい事であると存じます。」

「ふう、ふう、たつた七つの子供に、何がわかるものか。」

「いや、さうではございません。その七年の間、その母君は片時も離れずにおいで

でしたのですから、フォントルロイ様は、他に代るものが無い程、大切に思つてお
 さいでございます。」



五 お城のなか

次の日、ロード・フォント
ルロイとハギツシャムさんと
の乗った馬車が、ドリンコー
トのお城に行く道の、長く積
いた並木の間を通つて行つた
時には、正午をずつと過ぎた
時分であつた。

伯爵は、その孫を晚餐の時
間に著くやうにつれて来い
と、いひつけた。それに、自

分だけで何か特別に考へられた事があつたと見えて、伯爵はその居間で、一人ゐる
處に、誰も付添はずに、その子を一人でよこすやうにしろといふ言ひつけてあつ
た。

馬車が、その轍の音を立て、その並木道の間を走つて行くうちに、フォントル
イは、立派なクシヨンに心持よくよりかゝつて、たまらなく面白さうに周囲の景色
に見入つてゐた。その目に見えるものは、すべて何もかも面白いものばかりだつ
た。きら／＼と光つて馬具のついてゐる、大きい見事な馬が引いてゐる馬車、美し
い揃ひの仕著せの著物をきた、背の高い御者や馬丁、それにも心がひかれてゐたの
だつたが、特別に、大門の扉に彫りつけてあつた紋章の冠が目についたのだつた。
それはどういふわけのあるものか聞かうとして、馬丁と知りあひになつた。

それから、馬車がお城の莊園にはひる門の前にさしかゝつた時に、その入口の兩
側の裝飾になつてゐる、石の獅子をよく／＼見ようとして、窓から首を出した。そ

の時に、青々とした蔦の覆ひからんだ家から出て来て、その門を開いたのは、い、血色の頬をした母親らしい女だった。二人の子供が、そのあとからついて馳け出して来たが、大きな目をまるくして、馬車の中にある若殿を見入つてゐた。母親らしいその女が笑を含ませて腰をかどめた。そのあとで二人の子供達も、母に教へられて、頭を下げ、挨拶をした。

フォントルロイは、

「あの女の人は僕を知つてるのでせうか？ 知つてると思つてるのでせうね。」

といったが、黒い天鵝絨の帽子をとつて、こつちからも笑ひかけた。そして、

「今日は！ ごきげんよう！」

と晴れやかな調子でいつた。すると、その女は嬉しさうな顔をしたやうに、セドリックには思はれた。初から笑ひかけてゐた口がだん／＼ほころびたやうになつて、その目元にも深切さうな笑ひが浮んで来た。

「若様、ようこそお著きになりました。お立派な若様でいらつしやいます事！ ！ ！ つまでもおしあはせでいらつしやるやうに、お祈り申します！」

と、いつた。フォントルロイは帽子をふつて、それに挨拶を返さうとしてゐる間に、馬車は、その女の前を通りすぎていつてしまつた。

「僕は、あの女の人が好きです。あの女の方は、何だか子供好きらしい顔をしてゐますね。時々、こゝに來てあの子たちと遊び度い氣がします。他にもつと多勢子供がゐますか？」

と、セドリックがいつた。

ハギツシヤムさんは、ドリンコートの若殿が門番の子供などと遊び仲間になる事は許される筈がないとは思つたが、それはあとで話せばわかる事だと思つて、黙つてゐた。

馬車はどん／＼進んで行つた。その馬車の通る道の兩側に、實に見事な大きい樹

が生ひ茂つてゐて、兩側から覆ひかぶさつた枝や葉で、生きたアーチが出来てゐた。こんな立派な威嚴のある樹を、セドリックは見た事が無かつた。ドリンコートの城は、イギリスの國ぢうのお城の中で、どこにも劣らない美しいものであつた。その莊園が廣く立派な事に就いては、幾つと指を折つて數へられてゐるのだつた。特別、その庭にある樹と並木道とは、どこにも肩を並べる處がない利立派なのであつた。それはその時のセドリックは知つてゐない事であつたが、それでも何を見ても、美しいと思はれないものは無いのだつた。

凄いほどの、大きな樹の間から、午後の日の光が、黄金の矛のやうに、突貫をしてゐる様子や、それからあたりがしんとして、何の聲もせず、その大きい樹の枝が風に吹かれて、ゆらくと動く隙間々々から、折々すいて見えるその先の庭の景色などが、一つ一つセドリックの心を喜ばせ、珍しがらせる事ばかりだつた。折々は眞青な、丈の伸びた羊齒が、生ひ茂つてゐる處がある。それから又、ブリーユー・ベ

ルの花がそよ風に吹かれて、ゆらくしてゐる。或る處では、青く木の茂つてゐる下から、不意に兎がとび出して、短い白いしつぽをちらと見せて、すぐ又茂みのなかにとび込んでしまつた。それを見てセドリックはとび上つて大笑ひした。それから又一度、馬車の通るすぐ間近の處から、突然、一群の雉子がけた、まじい羽ばたきをして飛び出して、飛んで行つた。

その時に、セドリックは手を拍いて、大きな聲をして、

「ねえハギツシヤムさん。綺麗な處ですね！ 僕はこれ程綺麗な處を見た事がありませんよ。ニューヨークの中央公園なんかより、ずっと綺麗ですね。」

と、いつた。そのうちに、馬車がいつまでも馳けつゞけて行くので、少し不思議に思つた様子であつた。

「門から家までが、何て遠いのでせう。どの位あるんですか？」と、聞いた

「さうですな、三マイルか四マイル位もありませうかな。」
と、ハギッシャムさんがいつた。

「さう、自分の家の門が、そんなに遠いなんて大變な事ですね。」

と、セドリツクはびつくりして言つた。それから間もなく、また驚いて感心してしまふやうな新しいものを見た。それは青い草の上に寝そべつてゐたり、馬車の通る音にびつくりして、見事な角をもつた頭を振り向けて、並木道の方を見て立つてゐる鹿がゐるのを見つけた事だつた。セドリツクは夢中になつて、聲の調子まで變つて、

「ここで何か見せものがあつたのですか。さうではないのですか。いつもここにゐるのですか！ 誰が持つてゐるのです？」

と、聞いた。それでハギッシャムさんは、

「いつでもここに居るのです。これは伯爵の、あなたのお祖父様のものです。」

といつて聞かせた。

それから又暫く行くと、お城が見えて來た。眼の前に儼しく聳え立つてゐるそのお城は、見事な錆びが出て、その幾つと數へ切れない程の窓には、夕陽の光が照り返してまばゆいやうに輝いてゐる。望樓、凸字形の壁、砲臺などが昔のまゝに残つてゐるし、處々の壁には、蔦がはひかゝつて茂り、その古びた様子を飾り立てゐるのだつた。お城の周圍には、芝生や、美しい花の咲いた花壇があつて、夥しい花が、今盛んに咲き亂れてゐる。幼いセドリツクの顔は、嬉しいので上氣してしまつてゐた。

「おい、こんな綺麗な處を僕は見た事がありませんよ。まるで王様の御殿そっくりですね。いつか僕はお伽噺の繪本でさういふのを見た事があるのです。」
と、いつた。

で、馬車が止つて、家にはひらうとする入口の大玄關の扉は、兩方にすつかりあ

けてあつて、その兩側に二列になつて召使たちが並んで、セドリックを連れて来てゐた。セドリックは、何故そんな風にして並んで立つてゐるのかわからなかつたが、綺麗な前の着物を著てゐるのが、すつかり氣に入つてしまつた。

この召使たちが、やがてはこの城と、それから城に附屬したすべてのものの主人になる筈の、この若殿に向つて敬意を表してゐるのだといふ事は、セドリックには少しもわかつてはゐないのだつた。糸の本で見た王様の御殿とそつくりの、この儼めしくさらびやかな城も、見事な樹の生ひ茂つた庭も、壯麗な大きな樹も、兎の遊んでゐる草原も、芝生を寢床にしてゐた班毛の、大きな眼の鹿も、そのうちにはすべてセドリックの権力の下に置かれるものである。けれども、考へて見るとつい二週間前までは、馬蹄薯だとか、鐘詰の鐘の真中に、ホップス爺さんと向ひあつて、高い臺から兩方の足をぶら下げて腰をかけてゐたので、その時には尙更の事、今になつても、これ程の大したものには、實際に何かの關係が生れて來るといふやうに

は、その心に思はれないのだつた。

召使たちが並んで立つてゐる上の處に、目に立たないやうでありながら立派な黒の絹のガウンを著た、年よりの女がゐたが、セドリックがはひると、他の者より近よつた處に立つてゐて、何かものを言ひかけさうな顔をしてゐるやうだつた。

セドリックの手を引いてゐたハギツシャムさんは、ちよつと立ち止つた。そしてその女の人に、

「メロン夫人、この方がロード・フォントルロイ様です。ロード・フォントルロイ、これが重緋のメロンといふ婦人です。」

と、紹介をした。セドリックは嬉しさうな顔をして、握手するやうに手を出しながら、

「あの猫をくれたのはあなたですか？ どうも有難う。」

と、いつた。すると、メロン夫人の年とつた美しい顔は、門番のおかみさんと同じ

やうな嬉しさを見せ、ハギツシオムさんに向つて、

「どちらでお目にかゝりまして、若様をお見そこなひするやうな事はございませんまい。お顔でも、御様子でも、エロル様そつくりでございますものね。今日は誠に
おめでたうございます。」

と、いつた。セドリツクはどうしておめでたいのか、不審に思はれた。それで腑に落ちないといふ風でメロン夫人の顔を見た。ちよつとの間、メロン夫人の眼に涙がにじんでゐた様子だつたが、別に悲しいといふ様子でもなかつた。でセドリツクを見て笑ひかけた。

「あの親猫は、美しい仔猫を二つ、こちらに残してまゐつたのでございますから、それをすぐお居間に差上げる事に致しますよ。」

と、いつた。

それからハギツシオムさんが何か小聲で二言三言いふと、メロン夫人が、

「お書齋でございます。若様をお獨りでそこに差出せといふおひつけでございます。」

と、返事をした。

それで暫く休んで待つてゐると、やはり同じ揃ひの制服を着けた、背の高い召使が来て、セドリツクを書齋の入口まで案内して行き、書齋のドアを聞いて、特に儀式張つた聲で、

「閣下、ロード・フロントルロイがおいででございます。」

と、いつた。
自分の身分は召使にすぎないものだが、この伯爵家の嫡孫が、未來に、受継がれる領地に著いて、伯爵に初對面をされる案内役になつたは、非常な榮譽の事と思つたのであらう。

その聲に續いて、セドリツクはその部屋の闕をまたいで、その書齋にはいつた。

165

この部屋は、又立派な広い間で、据えてある道具はすべて、大して立派な彫刻のしてあるものばかりである。幾段も敷へ切れない程ある本棚には、本がぎつしり詰まつてゐる。そこに置いてある道具はすべて黒ずんだ色に塗つてあり、そこらにかゝつてゐる織物もすべて沈んだどつしりした色だつた。ダイヤモンド形のガラス窓が特別深くなつて居り、部屋のはづれからはづれまでが遠い距離があるので、外の光線が薄暗く映つて、全體がぼんやりと暗く見えるやうになつてゐるのだつた。

セドリツクは、はひつたちよつとの間は、この部屋には誰もゐないのだと思つたが、やがて、大きいストーブに火が燃えてゐる、その傍のところ置いてある大きい椅子に、誰か腰をかけて居るのが見えた。

その人は初めのうち、セドリツクの方を振り返つて見なかつた。そして他の者でセドリツクの方に目をつけたものがあつた。その椅子のそばのゆかに、茶色の、立派なマスチップ種の犬が寝そべつてゐた。それはからだも四つの足も獅子位の犬

ささの犬だつた。この大きい犬が儼めしい様子で起き上つて、この小さい男の子の方に向つて、ずし／＼と足音をさせて歩いて來た。この時に、初めてその椅子に腰を掛けてゐた人が聲を出して、

「ダウガル、こつちに來い！」
と、いつた。

しかし、ロード・フォントルロイの心には不深切な氣持も持つてゐないが、それよりも怖氣といふものは、ちつともないのだつた。それに生れつき勇氣のある性質なので、別に何とも思はないでその大きな犬の頸輪の處に手を置いて、犬と一緒に静かに進んで行つた。

歩きながら、ダウガルは頻りに鼻を動かして、臭ひを嗅ぐやうにした。この時伯爵は初めて顔をあげて、こちらを見た。その時に、セドリツクの目に映つたのは、頭の毛も、眉毛も白くふつさりしてゐて、窪んだ烈しい目、その目の間から鷺の嘴

のやうな鼻を持つた」からだの大きな老人であつた。伯爵の方の目に映つたのは、その襟にレースの飾のついた黒天鵞絨の著物を著た、すらつとした子供の姿であつた。如何にも素直で、それできりつとした顔をして居り、愛嬌毛がふつさもと浪を打つてゐるその子が、何となく親しさに自分の方を見てゐるのだつた。

この城を、かりに昔噺の宮殿だとすると、セドリックは、その物語の中の美しい若君だと思はれるやうである。けれども自分では、さういふ事を少しも思つてゐるやうにもないありのまゝの子であつた。しかし伯爵は、かういふ風に、しつかりした様子の子が、自分の孫であるのを見たり、大きな犬の首の處に手を置いて、少しも臆した様子がなく、自分と顔を見合せた様子から、その烈しい氣性の心が急に嘉しい誇りの情が燃え立つやうになつた。セドリックがその大きな犬に向つても、それから自分に向つても、少しも怖けてびくびくした様子をしてないのが、この武々しい年とつた貴族の心には、ひどく氣に入つたのだつた。

セドリックは、門番のかみさんや、取締の女にしたのとおんなじ調子で、伯爵のずつと傍の處に寄つて行つて、

「あなたが伯爵ですか？ 僕はハギツシヤムさんに連れて來て貰つたフロントルロイです。わかつていらつしやるのでせう？」

と、いひながら、伯爵に對してもさうするのが禮に叶つた事で、爲さねばならない事だと思つて、手を出して、もうよく知つてゐる人のやうにした。

「如何ですか。今日おめにかゝつたのが、僕は實に嬉しいのです。」

伯爵は目に奇妙の光を表しながら、握手をした。初めのうちは、少し呆氣にとられたやうな氣味で、何とも言はずにゐたが、上から冠りかゝつてゐるやうな眉毛の下から、美しい姿のセドリックを見て、頭の先から足の爪先まで、すつかりしげげと見てしまふと、やつと、

「さうか。お前は私に逢つたのが嬉しいか？」
 といった。

「え、實に嬉しいのです。」

と、いつて、セドリツクは自分の傍に椅子があつたのに、先づ腰をかけた。その椅子は後の凭り掛りも高かつたし、腰を掛ける處も随分高かつたので、それに腰をかけると、セドリツクの兩足は下に著かなかつた。しかし、それでも樂さうな椅子でちやんと腰を据えて、お祖父さんの儼めしい顔を、控へ目にしてゐながら、じつと眼を離さずに見てゐた。そして、そのうちにかういつた。

「僕はあなたがどんな人かと思つて、随分考へてゐました。船の中で、寢臺に寝てゐるうち、ひよつとすると、あなたが僕のお父さんに似てらつしやりはしないかと思ひましたよ。」

「似てゐたか？」

と、聞かれると、

「さうですね、お父さんの亡くなつた時は、まだ僕は随分小さかつたのですから、顔を本當にはつきりと覺えてゐないかも知れませんが、何だか、似てはいらつしやらないやうですよ。」

といった。

「では、お前失望したらう？」

「いえ、それはね、自分のお父さんに似てる人はそれは誰だつて好きですけれども、お父さんに似てなくつても、お祖父さんの顔なら、やつぱり好きだと思はれます。あなたでも自分の親類の人は誰でも好きでせう？」

伯爵は、後の方からだを反せて、セドリツクを見詰めてゐた。自分の血族に親しむといふ味ひについては、伯爵にはその心がよく解つてゐないのだつた。何故かと言へば、伯爵はこれまで、いろ／＼な場合に、その親類の人達と、随分激しい争

ひをして来た。そして出入を禁じたり、ひどい綽名をつけて謗つたりした。さういふ事をしたので、その親類の人達から、眼の敵の様に憎まれてゐたからであつた。

フォントルロイは、續けて又かういつた。

「さうしてね、小さい子供が自分のお祖父さんが好きだつてことは、定つた事です。よ、あなた見たいに、深切なお祖父さんなら、なほです。」

この年とつた貴族の眼からは、又妙な光が表れた。

「さうか、私はお前に深切だつたか？」

フォントルロイは勢ひづいたやうになつて、

「さうですとも。ブリジェットだの、林檎屋のお婆さんだの、チックだのに、僕はお祖父様に随分お禮を言はなければならぬのです。」

と、いつた。

「何を言つてる？ ブリジェット！ 林檎屋！ チック！」

「そら、あの人達に遣るのだつて、どつさりお金を下さつたでせう。その人達のことですよ。そらね、僕がほしいだけ遣れつて、ハギッシュャムさんにさういつて下さつたでせう？」

「ホ、あの事だつたのか、さうだつたか！ お前が好きなやうにしろと言つて置いた金の事だつたか。それでお前はあの金をどういふ事に使つたか。話して聞かせなさい。」

と、いつて、伯爵は、そのふさ／＼した眉の處に、少し皺を寄せて、ちつとセドリツクを見詰めた。この子供がどんな事を樂しみにしてゐるか、それが聞いて見たくなつたのだつた。

「あゝさうだつたのですね。お祖父さまは、チックや、林檎屋のお婆さんや、ブリジェットやの事は知つてらしやらないのでしたね。お祖父様が、こんな遠くにいらした事を、僕は忘れてしまつたのです。三人とも僕の親友なのです。それで、

あのミケールがね、熱病で……」

「そのミケールといふのは、誰だ？」

「ミケールつてのはね、ブリジエットの御亭主です。そしてね、随分困つたのです。病氣なのに、働く事が出来ないで、それに十二人も子供があつたら、どんなに大變でせう？ ミケールはいつでもごく眞面目な人なのです。さうしてね、ブリジエットが僕の家に來て始終泣くのです。あのハギッシェムさんが、僕の家に來た晩なんか、食物がなくなつて、家賃が拂へないのだつて、臺所で泣いてたのです。僕が逢ひに行つてゐたら、ハギッシェムさんが呼んで、お祖父さまが僕に下さつたお金を、預つてあるつて言つたのです。それから僕が臺所に馳けてつて、ブリジエットに遣つたのです。ブリジエットはあんまりびつくりしてしまつて、初めのうちは、本當だと思はないのですよ。だから、僕はお祖父様が有難いのです。」

伯爵は、そのいつものおしつけたやうな調子で、

「あの金を、お前が好きやうに使つたといふのは、さういふ事だつたのか。それで、他にはどういふ事をした？」

と、伯爵は聲を深めるやうにして聞いた。

で、その大きな犬のダッガルは、セドリックが椅子に腰をかけた時に、そつ傍に坐つたが、そこで幾度もセドリックの方を見上げながら、その話を聞き入つてゐるやうに思はれる様子をしてゐた。このダッガルは非常にいつこくな犬で、自分の犬としての身分に對して、軽々しい事は出来ないと思ひ込んでゐる様子だつた。伯爵はふだんからこの犬の心持をよく知つてゐたので、心のうちで、犬がどうするだらうと思つて氣をつけて、その様子を見てゐた。ダッガルは、ふだんなか／＼輕率に人に馴れる犬ではなかつたので、セドリックが撫でるのを、別に何ともせず、じつとして坐つてゐるのを見ると、不思議な事だと思つたのだつた。

そのうちに、ダッガルはゆつくり構へて、フロントルロイをしげ／＼見てゐるやう

ち、如何にも満足したらしく、やがて、その獅子のやうなすさまじい頭を、黒天鷲絨ビロの小さい膝ひざの上に、ちやんと載せたのだつた。

セドリツクは、この新しい友達を小さな手で撫てながら、お祖父様に話しかけてゐた。

「それからヂツクね、お祖父様はきつとヂツクがお好きですよ。随分キチャウメンなのですからね。」

これは伯爵に、聞いた事のないアメリカ言葉であつたので、

「それは何の事だ？」

と、聞き返した。フォントルロイは暫く考へて見た。自分にもキチャウメンといふ言葉がはつきりとわかつてゐたのではなかつた。たゞふだんヂツクが始終好んで使ふ言葉だつたので、それで自分も使つてゐたのだつた。

「僕は、それはかういふ事だと思ふのです。ヂツクが人を欺したり、自分よりか小

さい子供を打つたりしないで、人の靴を磨く時に、なるだけよく光らせる、さういふ事だと思ふのです。ヂツクは靴磨なのですから。」

「それがお前の知り合ひか？」

と、伯爵が訊いた。

「え、僕のもう古い友達なのです。ホップスをちさん程は、古くからでないのですけれども、えもう随分古くからの友達なのです。船が出る時に、贈物をくれましたよ。」

といつて、セドリツクはかくしの中に手を入れ、ちやんとたゝんである赤い物を引き出して、得意さうに、それを擴げて見せた。それは例の馬の首と馬蹄とが紫の色で織り出している、赤い絹のハンケチだつた。

「これをくれたのですよ。僕はこれをいつまでも持つてゐようと思ふのです。そら頭に巻いてもいいし、かくしに入れてもいいでせう。僕がね、ジェリーにお金

をやつて、デックに新しいブラシを買つてやつてからね、それからあとで儲かつたお金で、これを買つてくれたのです。デックのお別れなのです。僕ね、ホッブスをおさんに時計を上げた時に、「これを僕の記念に」と書いて置いたのですが、このハシケチを見ると、僕はすぐデックの事を思ひ出しますよ。」

處で、自分の高いドリンコートが、だん／＼とかういふ話を聞いて、その心に感じた心持は、何といつていゝかわからない、特別のものであつた。伯爵は随分世なれた、年よりの貴人であつて、さう輕卒にも心を動かされるといふ事は無い質の人であつたが、今度ばかりは、あまり意外なものに逢つたので、呆れたやうになつて、容易に言葉も出ない程だつた。

この伯爵は、前から子供嫌ひであつた。伯爵は自分の樂みをする爲めに、心を屈託させてゐて、子供の事などを考へるひまがなかつたのだつた。自分の子供達が幼かつた時分に、それを別にかわい／＼と思つた事などは少しもなかつた。たゞその中

で、セドリツクの父だけが、勇ましいしつかりした子であつたのを、時折思ひ出す事があつた位だつた。その上、これ迄の長い間、自分はしたい三昧を爲通して來て他の人の爲めに盡すといふやうな事を喜んだ經驗は殆ど無かつたのだつた。それで素直な心の子供が、どれ程優しい心持を持ち、信實が深く、愛情の美しい者であるのか、その無邪氣な、あどけないふるまひの中に、どれ程清らかで、素朴で、愛情がこめられてゐるか、さういふ事に就いては、全く知らないのであつた。

男の子といふものは、どこまでも嚴重にやかましくして置かないと、我儘で、ねだり事をしたり、騒がしい、うるさい生き物だと思ひ込んでゐた。その上の二人の男の子は、いつもみんなを困らせて手こずらせてゐたのだつた。それと比べて末の子の事に就いては、これといふ苦情が耳にはひらなかつたが、それといふのは、その子が末なので、外の子ほど幅がきかなかつた爲めだと、ぼんやり心に定めてゐたのだつた。處で、今度の場合が起つて、その孫の幼い子が、自分の氣に入る事があ

らうなどとは、全く想像もしてゐない事であつた。たゞ、ほんのちよつとした名譽心を起したので、その爲めにセドリックの迎ひを出したのである。

さういふ事をしたといふのは、その子供は未來に自分の跡をつぐやうになるのだから、さうだとすると、然るべき教育もしてない、下賤な育ちの者に、この家を繼がせるやうな事があつては、家の恥になると心に思つたのであつた。それに、今までの通りにして大きくなるまでアメリカに置いておくと、たゞ／＼賤しい人間になるばかりだと思つてしまつたので、決して伯爵の心に、セドリックをかわいと思ふやうな心持があつた譯ではなかつた。

それで伯爵は、そのまだ見ない孫が、なるだけ醜くない子であつて、人に對して耻かしい思ひをしなくつてすむ位、愚であつてくれなければいゝがと思つてゐたのだつた。しかし、自分の息子の上一二人に對して、失望し切つた経験がある事だし、末子のキャプテン・エロルに向つては、アメリカの婦人と結婚したといふ事で、も

う怒り切つてゐたのだから、そのキャプテン・エロルの結婚の結果から、何一つ喜ぶ可き事が出来ようとは、決して思はれなかつたのである。

それで召使の男が、

「フオントルロイ様がおいでになりました。」

と、言つた時には、伯爵はかねて、その心の中で、こんな風だらうと氣にして考へてゐた、不快な事を、今日の前に見るのだと思つて、その子供の方に顔を向ける事が、堪へられない位嫌だつた。どうせ失望しなければならぬ程なら、その失望の様子を人に見られる事は堪へられないと思ふ、その心持から、この日も、その子を誰もつきそひなして自分の部屋によこせと言ひつけたのであつた。さういふ心持になつてゐた處だから、セドリックがおど／＼した様子もなく、自分の大きな犬の首の處に手を置いて、ゆつくりした足どりで歩いて來たのを見た時には、その傲慢な心が踊り出す程嬉しかつたのであつた。それは、これまでにい／＼と思ひ直して